

ASHOKA JAPAN

innovators for the public
Progress Report IV December 2016 - February 2018



How is the world different because you are here?

あなたがいることで世界はどう変わるだろう？



Contents

05	アショカ、そしてアショカ・ジャパンについて	Ashoka and Ashoka Japan
06 - 07	アショカ・ジャパンの活動	Ashoka Japan's events 12/2016 - 2/2018
08	アショカの歴史	History of Ashoka
09	四段階のソーシャル・インパクト	The Four Levels of Social Impact
10 - 11	アショカの用語解説	Ashoka's Glossary
12	アショカ・フェロー	Ashoka Fellow
13	日本のアショカ・フェロー	Ashoka Fellows from Japan
14 - 15	アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ	Ashoka Fellow Speaker Series
16 - 21	ユース・イヤーズ チェンジメーカー・スクール アショカユースベンチャー	Youth Years Changemaker Schools Ashoka U Youth Venture
22	コークリエーション ウォールズノーモア	Co-Creation Walls No More
23 -24	ニュース	News
25	アショカに参加する	Join Ashoka!
26	賛同者および協力者	Partners Allies Friends Staff
27	ビル・ドレイトンからのメッセージ	Message from Bill Drayton

Systemic Change

Scaled Direct Service

Direct Service

Framework Change

アショカ、そしてアショカ・ジャパンについて

ASHOKA and ASHOKA JAPAN

システミック・チェンジメーカーの発掘から、“誰もがチェンジメーカー”の取り組みへ

「目の前に見える問題の解決ではなく、その問題を取り囲むシステムを根本的に変えることが、国や大陸を超える大きな変革につながる」という構想が1970年代の米国に生まれました。

この、システミック・チェンジ(Systemic Change)と呼ばれる構想の生みの親であるビル・ドレイトン(Bill Drayton)は、彼の描いたシステミック・チェンジメーカーの基準にかなうグローリア・デスーザをインドで見出し、アショカ・フェロー第一号として1980年に認証しました。デスーザが樹立したEVS(Environmental Studies)教育法は、それから3年の内にインド1700校で導入され、さらに数年後にはインド国内の全公立小学校に取り入れられ現在に至っています。このようなシステミック・チェンジメーカーを発掘する活動母体として、アショカは1980年に米国ワシントンD.C.で発足しました。設立から4年以内に36人のアショカ・フェローが認定されました。孤軍奮闘する彼らに財政支

援を与えるだけでなく、彼らを政治的な危険からも守る強力なネットワークへと拡大。2018年2月現在、93カ国で約3500人のアショカ・フェローが活動し、システミック・チェンジによる根本的な社会変革を推進しています。

アショカ・フェローのネットワークが世界80カ国に広がり、フェローの数が2500人を超えた2009年前後から、アショカ内である認識が生まれました。それは「世界の目まぐるしい変化に対応するには、これまでのようなフェローの発掘だけでは間に合わない。チェンジメーカーの供給は需要に追いつかない」というものです。

そこで、これまでのフェロー発掘活動とは別に、“誰もがチェンジメーカー(Everyone a Changemaker)”の標語のもと、若者を対象とした取り組みの展開が始まりました。子どもたちが新しい時代のリーダーとして育つ環境創りが、アショカのもう一本の柱として加わったのです。

2011年東アジア初の拠点として誕生したアショカ・ジャパンは、次のマイルストーンに向けて前進する

南アジアで始まったアショカの取り組みは、豊かな日本には関係ないと思われていました。例えば、安全な飲み水がない、政治家の汚職が当たり前、などの問題は日本にはありません。また、移民や難民の受け入れが進まない日本には、西ヨーロッパのようなイノベーションは必要ないと考えられているのかもしれませんが。銃規制と麻薬規制が堅固な日本は、世界中が羨む世界で最も安全な国です。しかし、家族で囲む日々の食卓といった「当たり前」のことが、もはや普通の営みでなくなってしまった昨今、諸々のしわ寄せが加速度的に生じているのではないか・・・私は日本にもアショカが必要な時代がやってきたと確信したのです。

日本へのアショカの導入の準備を始めたのが2009年。まず着手したのが、若い世代のチェンジメーカーを輩出する「アショカ・ユースベンチャー」の取り組みでした。2010年その実験的な活動を実施し、2011年春の東日本大震災をきっかけに、震災の復興に携わる若いイノベーターを育むシステムをつくる試行錯誤を始めました。それからは、若きチェンジメーカーのネットワークを創る取り組みを、加速的に展開してきました。しかし、その頃は「目の前にある問題の処理(P9「ダイレクト・サービス」参照)」ではなく「人の意識と社会の規準を変えることによって問題を生む土壌を変え、結果的に世界を大きく変える(P9「システミック・チェンジ」参照)」というアショカのビジョンに対する理解や賛同は、まだ多くはありませんでした。「この平和の国にアショカが解決すべき問題があるのか？」という声が私の耳に多く届いたことも事実です。

しかし、アショカ・ジャパン発足から7年の時を経て、蒔き続けた種が芽を吹くような、目に見える変化が起り始めています。そのひとつは、システミック・チェンジについての理解の浸透です。2017年、ある日本企業が医療イノベーションにシステミック・チェンジを起こした北米のフェローへの出資を決定しました。これは日本企業とアショカ・フェローのパートナーシップの第一号となりました。続けて、社員を対象とする「アショカ・フェローからシステミック・チェンジを学ぶワークショップ『Fellow-in-Residence』」の開催が決まりました(2018年7月スタート。P22参照)。時代の先を読む企業における「全ての人が恩恵を受ける大きな目標を目指す長期的な戦略」への関心の高まりを強く感じています。

もう一つの大きな実りは、2012年から本格的に始めた「アショカ・ユースベンチャー」経験者や、アショカ・ジャパンのインターンのなかから、社会を変える仕事を選ぶ若者が増え始めているということです。そのなかには、昨年4月アショカ・ジャパンに就職した二人のスタッフも含まれています。優秀な若者たちが彼らの内発的な動機に基づいて、自分の人生だけでなく「より良い世界をつくる」という高邁な目標に向かってキャリアパスを描く現象は、従来の「成功」の定義が揺らぎ始めているということかもしれません。これらの目に見える変化は、私たちにとって、新しい世界を築く行程の指標であり、宝物であり、次のマイルストーンに向けて邁進するためのエネルギーの源でもあるのです。



渡邊奈々 Nana Watanabe
アショカ・ジャパン 創設者・チェアパーソン
Founder and Chairperson Ashoka Japan

December 2016 - February 2018

アショカ・ジャパンは全ての人が
チェンジメーカーになる世界を目指して前進を続けます。

Ashoka Japan continues its effort to move towards
an 'Everyone-a-Changemaker' world

2016



Dec.10 | KOBE
第26回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 26th Youth Venture Panel Selection

新たなユースベンチャラーを認定するパネル審査会を神戸で開催し、1組が選出されました。

2017



Feb.25 | TOKYO
第8回 We are the Change
第27回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 8th We are the Change and
The 27th Youth Venture Panel Selection

全国から集結したユースベンチャラーによる活動報告会や、来場者参加型のコンテンツが企画されました。また、ユースベンチャラーが新たに3組選出されました。(We are the Changeについては P18 参照)



Mar.10 | SENDAI
第28回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 28th Youth Venture Panel Selection

ユースベンチャラーが新たに1組選出されました。また、来場した若者と彼らを応援する大人たちによる交流の場になりました。



Apr.7 | TOKYO
ビル・カーター 対話会
Dialogue with Bill Carter

アショカ・グローバル・オフィススタッフであるビル・カーター氏来日に際し、イノベーションやソーシャル・アントレプレナーについての対話会を開催しました。



Apr.29 | TOKYO
第29回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 29th Youth Venture Panel Selection

ユースベンチャラーが新たに3組選出されました。今回より、卒業生ユースベンチャラーがパネリストに加わっています。



Jun.17 | TOKYO
エル ウーマン・イン・ソサエティ
ELLE Women in Society

女性雑誌「ELLE」主催イベントにて、アショカ・レバレッジの上田彩果とスタッフの中川が、「自身の想いをライフワークにして生きていく」というテーマのもと登壇しました。



Jun.25 | SENDAI
第30回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 30th Youth Venture Panel Selection

ユースベンチャラーが新たに1組選出されました。また、任期中ユースベンチャラー2組による活動報告会も同時開催しました。



Jul.29 | TOKYO
フェロー対話会 パルタップ・チョハン
Dialogue with Ashoka Fellow Partap Chauhan

パルタップ・チョハン氏による対話会を開催しました。チョハン氏は、携帯電話とインターネットを通じて、インド国内外の人が無料でアーユルヴェーダにアクセスできるシステムを作った、インドのアショカ・フェローです。



Aug.17-31 | Osaki-Kamijima HIROSHIMA
第2回 HELIO 開催
The 2nd Human Ecology Lab &
Island Odyssey Summer Program

HELIO (Human Ecology Lab in Osaki Kamijima) は、広島県大崎上島町で新しい教育のカタチをデザインするサマープログラムです。アショカが認定する大学ネットワーク (ASHOKA U) から、海外の大学生と日本の大学生約25名が参加しました。



Aug.19 | Iwaki, FUKUSHIMA
アショカ・ユースベンチャー活動報告会
Youth Venture Activity Presentation

任期中のユースベンチャラーによる、活動報告会です。ソーシャルアクションに興味のある若者も多数来場しており、全員参加型のワークショップも同時開催しました。



Aug.21
林賢司が新たにフェロー選出されました
Kenji Hayashi is selected as the 6th Ashoka Fellow from Japan

新フェローの林賢司氏は、大きなポテンシャルを秘める初期段階のイノヴェーターとして選出されました。林氏が取り組むのは「エリートの生きる途の転換」です。(取り組みについては、P13 参照)



Aug.29 | TOKYO
米スワースモア大学
デニス・クロッサン教授との対話会
Dialogue with Professor Denise Crossan from Swarthmore College

米スワースモア大学の教授、デニス・クロッサン氏と日本のアショカ・フェローや社会起業家の対談を行い、日本の社会課題やそれを解決し得るイノベーションについて話し合いました。アショカ・フェローである、岩元氏と林氏も参加しました。



Sep.4 | TOKYO
第12回 アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ
ジェリー・ホワイト
The 12th Ashoka Fellow Speaker Series: Jerry White

上級アショカ・フェローであるジェリー・ホワイト氏による講演会を開催しました。(活動については、P14 参照) 9月2日は鈴木寛氏、4日は柳瀬博一氏を対談者として迎え、より深いお話を伺いました。



Oct.14 | TOKYO
アショカ・レバレッジ活動紹介
Ashoka Leverage Presentation at Mizuho Bank

アショカのパートナー企業であるみずほ銀行にて、社内向けの対話会として、アショカ・レバレッジの上田彩果が登壇しました。



Oct.21 | TOKYO
第9回 We are the Change
第31回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 9th We are the Change and
The 31st Youth Venture Panel Selection

全国から集結したユースベンチャラーによる活動報告会をはじめ、アショカ・フェローのパルタップ・チョハン氏による講演や、ヤフー株式会社との合同企画を開催しました。また、ユースベンチャラーが新たに1組選出されました。



Nov.3-5 | YAMANASHI
アショカ・ユースベンチャー合宿
Youth Venture Retreat

山梨県山中湖畔にて、ユースベンチャラー合宿を開催しました。第一回目となる当企画では、約15名のユースベンチャラーが参加し、「自己内省」「コンフォートゾーンを抜けて行動へ」というテーマのもと、様々なワークショップを通して2泊3日を過ごしました。

2018



Feb.17 | TOKYO
第10回 We are the Change
第32回アショカ・ユースベンチャーパネル審査会
The 10th We are the Change and
The 32nd Youth Venture Panel Selection

ユースベンチャラー及びアショカ・スタッフによるオープンセッションをはじめ、2017年選出アショカ・フェロー林賢司氏による講演、パネル審査会を開催しました。新たに4組のユースベンチャラーが選出されました。



Feb.19-24 | ITALY
女性イノベーターがイタリアで集結!
Female Innovators gathered together in Italy to discuss future of social innovation beyond gender and borders!

美しいコモ湖畔の町ペラジオで、女性フェローやアショカスタッフが10ヶ国から集まり、ジェンダーや国境を超える社会イノベーションについての議論を展開しました。

History of ASHOKA アショカの歴史

社会起業家の構想が生まれてから、“誰もがチェンジメーカー”というパラダイムシフトまで
From the birth of social entrepreneurship to an “Everyone-a-Changemaker” world

1970's

The Seed

アショカ流社会問題解決へのアプローチ
「システミック・チェンジ」の誕生

“Social entrepreneurs are not content just to give a fish or teach how to fish. They will not rest until they have revolutionized the fishing industry.”

社会にある数多な問題を根本的な解決に導くのは、応急措置ではなく、それらの綻びを生み出している仕組みそのものの変革、つまり「システミック・チェンジ」であるという発想がビル・ドレイトンによって生み出された。彼は、ソーシャルワーク(社会福祉)とアントレプレナーシップ(ビジネス起業)を組み合わせた新しい概念と呼称「ソーシャル・アントレプレナーシップ(Social Entrepreneurship)」 「ソーシャル・アントレプレナー(Social Entrepreneur)」を創造した。そして、システミック・チェンジのアイデアを生み、実行し、継続させる能力を備えたシステミック・チェンジメーカー(ソーシャル・アントレプレナー)を発掘し、彼らの取り組みが加速するシステムを構築できないかと考えるようになった。

1980's

The Beginning

"社会を変えるシステミック・チェンジメーカー"の発掘をスタート

“The job of a social entrepreneur is to recognize when a part of society is stuck & to provide new ways to get it unstuck.”

ドレイトンが1970年代から抱いていた構想を具現化する活動母体として「ASHOKA Innovators for the Public」を非営利組織として1980年、米ワシントンD.C.に発足。
1980年、インドで新しい学習法EVS(Environmental Studies)を考案し、その取り組みを広めようとしていたグロリア・デスーザという女性がいた。彼女はアショカの規定するシステミック・チェンジメーカーの基準に沿うと判断し、アショカ・フェロー第一号として認定。デスーザが活動に専念できるよう、3年間の生活費を支給。EVSはこの間にインドの1700校に導入され、その後、全小学校に普及。この時の「3年間の生活費支給」が、フェロー支援のモデルとして定着し、その後インドネシア、ブラジルへとネットワークが拡大していく。フェロー数は、1988年には4カ国100人に広がり、最先端の社会起業家が互いにサポートしあう世界初のネットワークとなった。

1990's

Replication

個人が社会変革の担い手になるという認識が浸透しはじめ、模倣が始まる

“Change begets change as much as repetition reinforces repetition.”

1990年後半までに、累計1000人以上の社会起業家がアショカ・フェローとして認定される。アショカが「ソーシャル・アントレプレナーシップ」という分野を確立し、明瞭で厳格な基準から選出した社会起業家の出現が、アメリカ社会の一部知識層の間で知られるようになる。90年代中頃から、アショカに類似した取り組みが、アメリカ、西ヨーロッパ、南米で始まる。

2000 - 2010's

Paradigm Shift: Framework change

システミック・チェンジが社会問題の解決を促すという
理解が浸透する時代

“The one single factor that determines society’s success is the percentage of change-makers within it.”

従来の発想を拡大し、すべての人を巻き込む、より大きなゴールとして「誰もがチェンジメーカー(Everyone a Changemaker)」を打ち出す。30年以上をかけて社会起業家のネットワークを構築する中で培った経験をもとに、幼少期にエンパシーを身につけ、若者はチェンジメーカーキングを実践し、そして、あらゆる組織では流動的な新しいチームワークでの働き方を通した社会刷新に取り組むことが求められているという合意が生まれる。(エンパシー、チェンジメーカーキング、新しいチームワークについては、P10-11 参照)

2000年 アショカ・ユースベンチャー Ashoka Youth Venture 発足

日常生活の中で抱く疑問や違和感に対して、自らの意思と行動によって社会にはたらきかける12～20歳の若者を、アショカ独自の基準で「ユースベンチャーラー(Youth Venturer)」として認定し、失敗を恐れず自由にチャレンジできる一年間の"実験の場"を提供。※日本では2012年より本格始動。(P18-21 参照)

2008年 アショカユー Ashoka U 発足

「21世紀の大学は社会をより良くする人材を育てる環境である」というビジョンに共鳴する大学を発掘し「アショカユー・チェンジメーカー・キャンパス(Ashoka U Changemaker Campus)」として認証。グローバルなネットワークの構築を始める。2018年2月現在、9カ国45大学がネットワークにある。(P17 参照)

2012年 アショカ・チェンジメーカー・スクール Ashoka Changemaker Schools 発足

21世紀のリーダーになるには、これまでの教育が重視してきた能力だけでは足りないという認識を持ち、エンパシー(他者の心に自分を重ね気持ち理解する能力)と、チェンジメーカーキング(おかしいと思ったら、自分が解決の当事者となるという自覚と勇気とスキルを持つ能力)という新しい時代を生きるための能力を育成する小中高校のネットワークを構築。2018年2月現在、30カ国300校。※日本では2017年よりリサーチ開始。(P16 参照)

- ・2000年 中東、北アフリカ地域に拠点設置。
- ・2000年 先進国で初めて、米国でフェロー発掘活動開始。
- ・2002年 カナダで発掘活動開始。
- ・2005年 西ヨーロッパ初となるアショカ・ドイツ発足。
- ・2011年 東アジア圏で最初の拠点となるアショカ・ジャパン発足。
- ・2013年 アショカ・コリア及びアショカ・ギリシャ発足。
- ・2014年 アショカ・イタリア発足。
- ・2016年 アショカ・ポルトガル発足。

2018年2月現在、39カ国に拠点を置き、フェローは93カ国約3500人、スタッフは39カ国に約500人。

The Four Levels of Social Impact 四段階のソーシャル・インパクト

ダイレクト・サービス | 大規模なダイレクト・サービス | システミック・チェンジ | フレームワーク・チェンジ
Direct Service | Scaled Direct Service | Systemic Change | Framework Change

組織にとって「インパクトを最大化する」とはどういうことだろうか？

アショカでは、以下に紹介する「四段階のインパクト」というフレームワークを使っている。

これは、どのアプローチがより優れているかを判断するものではなく、インパクトを基準にして段階ごとに組み立てたものである。

アショカは、システミック・チェンジと、フレームワーク・チェンジの観点全ての活動の基盤としている。

システミック・チェンジ Systemic Change

システムの変革

問題を取り囲むシステムを掘り下げ介入することによって根本的な解決を目指す新しい社会問題解決モデル。1970年代まで、社会を変えたいと願う普通の市民ができることは、ストライキ、デモ、または従来の慈善事業しかなかった。そのような状況の中で、アショカの創設者ビル・ドレイトンによって「システミック・チェンジ」という新しい概念が生まれた。応急措置的な状況や状態の緩和ではなく、問題を生み出している根本的な原因を探り、新しい仕組み(システム)を生み出す個人を「システミック・チェンジメーカー」と定義し、アショカ・フェローとして認定している。アショカ・フェローが生み出す変革は、政策の変更や、その分野における主要組織の多くが新しい手法を採用すること、また既存の市場やシステムにおいて新しいパターンを生み出すことなどを伴うケースが多い。

人権、教育、環境、経済発展などの領域で活動するアショカ・フェローは、2018年時点で93カ国約3500人。毎年200人の発掘を目指している。アショカ・フェロー(システミック・チェンジメーカー)の基準についてはP12参照。

(例)

・マイクロクレジット(小額ローン)は、最貧困層の女性が貧困から抜け出すための仕組みとなった。

・Bコーポレーション(B-Corporations)は、社会と環境に配慮している会社への認証システムをつくり、企業が社会に対して負う責任を再定義した。

・ウィキペディアは、オンラインの情報を民主化し貧富の差を超えて誰もが参加できるようにした。

フレームワーク・チェンジ Framework Change

意識と行動のパターンの変革

システミック・チェンジによってある分野の仕組みと基準が変わったのちに、より大きな意識の変革がやってくる。社会全体を貫く行動パターンが変わるほどの規模で、個人個人の意識に影響を与える変化となれば、それは「フレームワーク・チェンジ」である。このパラダイムシフトは、ある特定の地域や国に対する取り組みではなく、多くの組織の努力が積み重なった結果、社会に浸透する新しい「当たり前」と言える。

(例) 基本的人権、女性の権利、市民権、民主主義、ソーシャル・アントレプレナーシップという概念。

大規模なダイレクト・サービス Scaled Direct Service

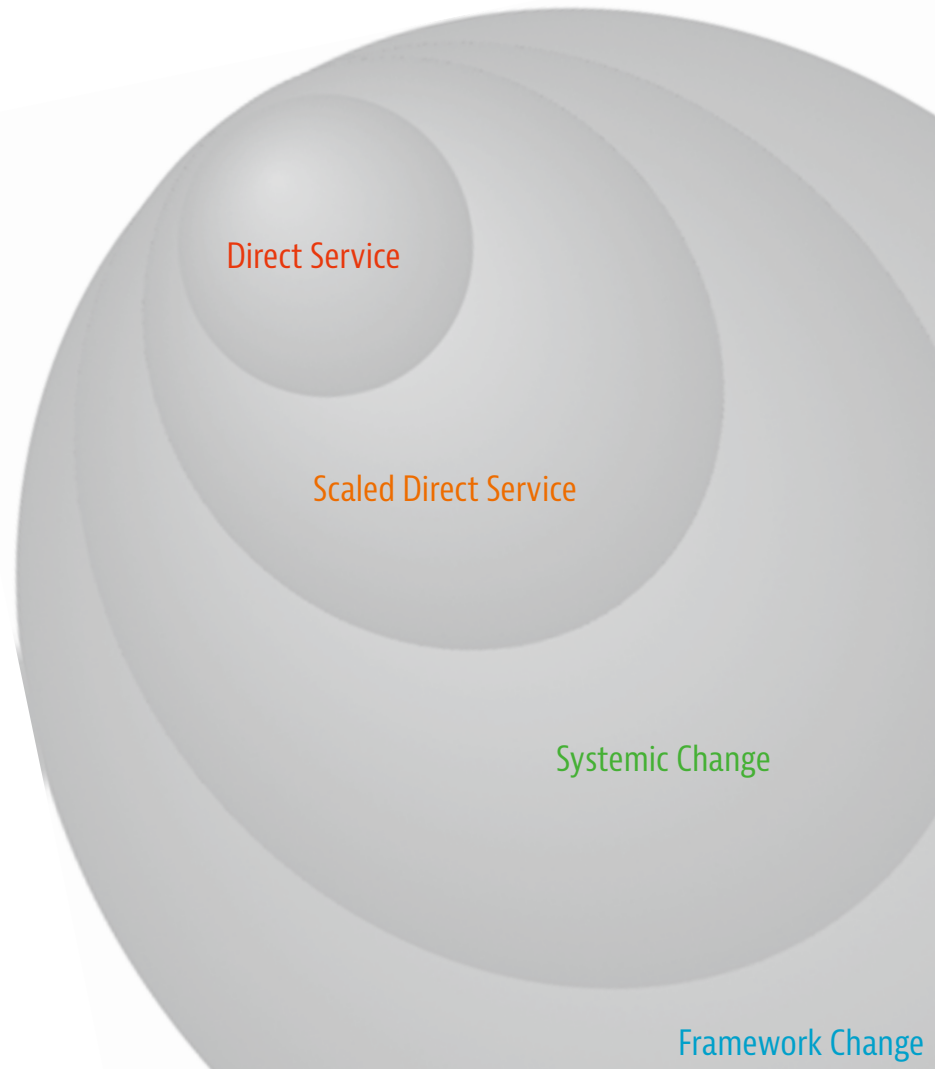
スケールを拡大したダイレクト・サービス

現場に根ざした直接的な活動を行うダイレクト・サービスの、規模が拡大した活動が「大規模なダイレクト・サービス(Scaled Direct Service)」である。大規模なダイレクト・サービスでは、活動を広範囲(全国的・全世界的)で展開することを試みる。活動や解決策が管理化・効率化され、より大きなインパクトを生むためのモデルである。模倣しやすいモデルにし、大規模に活動が行われることによって、より多くの人が恩恵を受けられるようになる。
(例) 赤十字、アメリコープ(アメリカ政府ボランティアプログラム)、難民支援プログラム。

ダイレクト・サービス Direct Service

現場に直接介入する奉仕的活動

食料、医療、その他のサービスなど、助けを必要としている人達に直接的にかかわる仕事。お腹を空かせた人達に食料が届けられる、メンターからのサポートによって学生たちがスキルや自信を身につけていく、法律や裁判に関する助けが得られるなど、現場での活動には明確で具体的なやりとりが見える。
(例) 貧困層への食事の配給、学生への少人数制アドバイスプログラム、地域住民への法律相談。



ASHOKA's Glossary

アショカの用語解説

アショカが描く「誰もがチェンジメーカー」である世界は、誰もが社会で居場所と役割を持ち、輝き、貢献する世界です。その世界の構築を可能にするのは、「エンパシー」、「新しい定義のチームワークとリーダーシップ」、そして「変える力（チェンジメイキング）」の習得です。

Ashoka builds, connects and amplifies a global community that is leading the Everyone-a-Changemaker movement. This requires a new framework for enabling everyone to thrive and contribute in society. Ashoka has developed an experience based framework of Empathy, Changemaking, New Leadership, and New Teamwork. That is the new foundation for living and working together.

Strategic Focus

エンパシー Empathy

エンパシーとは、他者の感情（悲しい、悔しい、などの否定的感情だけでなく、嬉しい、誇らしい、などの肯定的感情を含む）を意識的に理解する努力をし、自分の行動を定める能力を指す。心の教育の第一人者メリー・ゴードンは、エンパシーを「自分の肺を（想像力で）他者の肺に重ね、その人の吸う空気を自分も感じることができる能力」と定義する。変化のスピードが倍々になり、多様化が進み、問題が複雑化している今の世界でチェンジメーカーとなる基盤がエンパシーであると、アショカは考えている。

Empathy is the ability to understand the perspectives of others and to use that understanding to guide one's actions in response.

チームワークの新しい定義 New Teamwork

これまでのチームワークは、役割を振り当て、各々が専門的スキルを受け持つというスキームから成る。新しいチームワークでは、全体像を把握しながら、チーム内にヒエラルキーや厳密な役割をつくらず、ニーズに応じて流動的に動く。そして、ニーズの減少に応じて、メンバーが自発的に散っていく。新しいチームワークでは、メンバーの成熟度と創造性が、従来のチームワークよりも必要とされる。

Teamwork that is currently needed in the world is different from the traditional paradigm that focuses on defined roles and repetitively applying specialized function skills.

リーダーシップの新しい定義 New Leadership

トップが指示を出し部下が従うというこれまでのヒエラルキーの組織構造におけるリーダーシップに代わる新しいリーダーシップをアショカは提唱し、実践している。新しい組織では、チームメンバー全員が全体像を把握し、各々がイニシアティブを取り、行動に繋げていく。「新しいチームワーク」と同様、メンバーの成熟度と創造性が、ことさらに重要となる。

New Leadership is where 'Everyone leads' and becomes the initiator who also has the 'big picture perspective'

チェンジメイキング（変える力） Changemaking

チェンジメイキングとは、左記のエンパシー、新しいチームワーク、新しいリーダーシップを体現することで社会の課題解決に貢献することである。人間の脳は、12歳頃から、チェンジメイキングを通して世の中に働きかけることが可能になると言われている。アショカでは、全ての子どもが、このチェンジメイキングを10代のうちから練習できる場を作ることを目指している。

Changemaking is putting the skills, behaviour and values of empathy, new teamwork and new leadership into action for problem solving and contributing to the community.

チェンジメーカー Changemaker

自分のコミュニティや会社などをより良くする責任感を持ち、そのためにチェンジメイキングを通して行動する人のこと。アショカは、全ての人が、何かおかしいと思ったら変化を起こせる社会、つまり「誰もがチェンジメーカー」の世界をビジョンに掲げる。

Changemakers are individuals who feel the responsibility and have the skills and confidence to lead change in their community, company or wherever they are best placed. Ashoka envisions an 'Everyone-a-Changemaker' world.

Ashoka Japan Programs

アショカ・フェロー Ashoka Fellow

社会の目に見える綻びに対する応急措置的な解決ではなく、その綻びを生み出しているところの水面下の原因を突き止め、その原因を変革する模倣可能な仕組みを考案し、行動に移し、大きなインパクトを及ぼす（初期段階の場合は、将来生み出すポテンシャルを秘めている）個人をアショカ・フェローとして発掘し、支援をしている。1980年以来、93カ国約3500人のネットワークを構築。（P12参照）

コークリエーション Co-Creation

世界を大きく変革するには、ビジネスセクターと市民セクターそして行政の間の壁を取り除き同じ目標に向かって協働することが必須であるとアショカは考えている。提唱するだけでなく、すでにドイツのペーリンガーインゲルハイム製薬とアショカの協働が始まっている。2017年10月第3回目の契約の延長（さらに3年間）を締結した。（P22参照）

アショカ・ユースベンチャー Ashoka Youth Venture

日常生活の中で抱く疑問や違和感に対して、自らの意思と行動によって社会に働きかける12～20歳の若者を、アショカ独自の基準で「ユースベンチャー」として認定し、失敗を恐れず自由にチャレンジできる実験の場を提供。日本では、これまでに全国で89組（約350人）の若者チェンジメーカーが生まれている。（P18-21参照）

アショカユー Ashoka U

「将来より良い世界を創るプレーヤーになる人材を、この大学から輩出する」という強い意思を持つリーダーが、少なくとも3人いる大学を認証しネットワークを築くことにより、当大学のみでなく国全体の大学の意識基準を上げることを目指す。現在は米コーネル大学、米ボストン大学、米クレモント・マッキーナ大学、英ノーサンプトン大学、加ローリエ大学を含む9カ国45大学のネットワークが出来ている。2018年2月現在、さらに3大学が審査プロセス中。（P17参照）

アショカ・チェンジメーカー・スクール Ashoka Changemaker Schools

21世紀のリーダーになるには、これまでの教育が重視してきた能力だけでは足りないという認識を持ち、エンパシー（他者の心に自分を重ね気持ちを理解する能力）と、チェンジメイキング（おかしいと思ったら、自分が解決の当事者となるという自覚と勇気とスキルを持つ能力）という新しい時代を生きるための能力を育成するビジョンを持った学校、教育関係者、保護者、地域、企業のネットワークの構築を目指している。（P16参照）

Ashoka Fellow

アショカ・フェロー

アショカ・フェローとは、社会をより良くするイノベーターの世界最大のネットワークであるアショカの基準を満たしたソーシャル・アントレプレナー（Social Entrepreneur）の名称です。

Ashoka Fellows are social entrepreneurs recognized by Ashoka. They are individuals with innovative solutions to social problems that have the potential to change patterns across society.

アショカ・フェローは、「目に見える不具合を生み出している根本的な社会の欠陥を是正する真新しい仕組み」を考案し、創り上げ、模倣されることで拡散させる能力を持つ個人です。表現を変えれば、これまでの「思い込み」という壁を崩し、「当たり前」を破壊し、新しい構造とルールを社会に浸透させる変革者とも呼べます。彼らは、目の前の問題に対処するのではなく、その社会問題を取り巻くシステムそのものに介入することによって、結果的に大きな変革をもたらします。システムは、「構成する要素」「要素の相互関係」「目的」の3つから成っています。フェローの中でも巨大なスケールのインパクトを浸透させた人たちは、並外れた正義感とエンパシー（他人の気持ちを我が事のように感じ理解する能力）に富んでいるという共通点を持っています。彼らは、システ

ミック・チェンジメーカーとも呼ばれます。1980年の創設から2018年の39年間に、93カ国で約3500人のフェローが選出されています。3500人の中でもトップ1～2%のアショカ・フェローは、数百万人から数億人へ影響を及ぼす変革を成し遂げています。アショカ・フェローの83%は、（選出から10年以内に）国の政策の変更を促すまでの影響を及ぼし、それぞれの分野の第一人者として活躍しています。また、91%の取り組みが、政府や他の団体に模倣されることによって、変革が拡大しています。一方、（3年間の生活費給付を受けたフェローのうち）85%が5年以内に独立し、本人の生活も取り組みの運営も、財政的に成り立つまでに成長しています。

「社会起業家」は魚を与えたり、魚の釣り方を教えるだけで満足はしない。
漁業全体に革命を起こすまで、手を休めることはない。

ビル・ドレイトン Bill Drayton

アショカ・フェローの選考について Selection of Ashoka Fellows

アショカの面接官は、フェロー候補者の発想やアプローチや取り組み、そして人となりを十分に知るために、これまで39年間に精査を繰り返し磨かれた選考方法を通じて候補者と向き合います。

Ashoka helps maximize social impact through a rigorous Fellow selection process that has been refined over 39 years. Candidates, through the interviews, are expected to communicate their ideas, scrutinize their methods, and reflect on themselves as individuals.

選考基準 Criteria for Selection

- New Idea**
これまでに存在しない全く新しいアイデアであり、アプローチである。
- Creativity**
クリエイティビティを持ってビジョンを追求し、実現する人物である。
- Entrepreneurial Quality of the Person**
アイデアを実現し、インパクトを出すまで全身全霊で打ち込むというアントレプレナーとしての気質が隅々までいわたっている。
- Social impact of the idea**
特定の文化や環境を越えて、インパクトを及ぼす可能性を含むアイデアである。
- Ethical Fiber of the Person**
真摯さ、誠実さ、倫理性を備えた人となりである。

アショカ・フェローとは、「当たり前」とされる思い込みを覆し真新しい基準を創る人です。

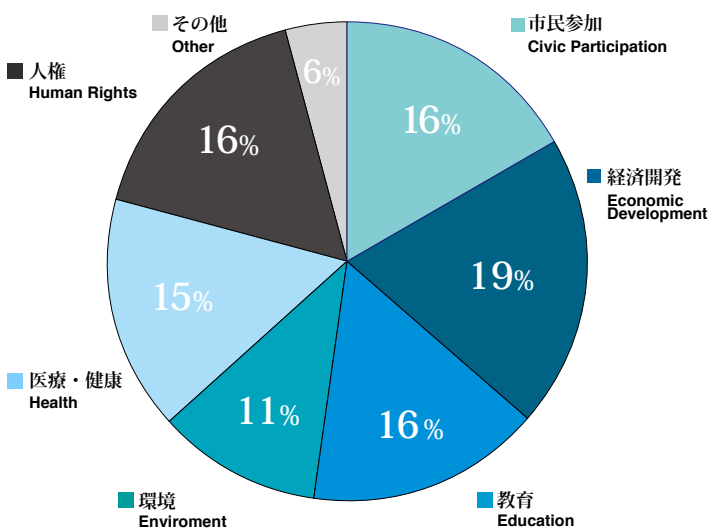


日本上級フェロー片山ます江は、「特別養護施設（特養）の質は低くて当たり前」というメンタルモデルを覆した。次は、高齢者デイケアセンターの新しい基準を創るべく米ポートランドで「オンコープレナー・カフェ」を2017年スタートした。（写真）片山の頭に描いた特養モデルが2013年に川崎市幸区にオープンした。



米国フェローのジム・トンプソンは、「試合に勝つ」と同時に「人間的に成長する」二つのゴールを充たす若者スポーツコーチ法PCAを開発し、スポーツコーチの新しい基準を定着させた。PCAコーチ法で指導を受けた学生は、これまでに860万人。

アショカ・フェローが活動する分野 The sectors Ashoka Fellows are engaged



Ashoka Fellows from Japan

日本のアショカ・フェロー



林 賢司

Kenji Hayashi

2017年選出

株式会社ファウンディングベース (FoundingBase) 創設者・共同代表
http://foundingbase.jp/

1986年東京都生まれ。大学生の頃、豊かな歴史を持つ福島県会津若松に魅せられ、彼なりに町の経済活性化の取り組みを始める。この経験を通して地方自治体との協働の難しさを学び、次に人口7500人の島根県津和野町をいかに活性化できるかの模索を始め、現在に至る。林が共同創設したファウンディングベース (FoundingBase) は、「様々なイノベーションが生まれる土台」を意味しており、マインドセットの転換を示唆している。

Kenji Hayashi is rejuvenating rural areas suffering from depopulation. By creating a new pathway for emerging urban professionals to build their careers as change agents in rural municipalities, Kenji is creating a system that enables the sustainable development of struggling rural communities.

日本では、出生率の減少による若者の都市への流出が加速し、地方の弱体化が急速に進んでいる。現在896ある日本の町村のうち約50%が2040年までに消滅するという調査結果が出ている。一方、「良い（とされる）学校」で学び、「良い（とされる）就職先」を見つけることがエリートの究極の目標であるという信仰が、特にここ5、6年ほどにおいて揺らぐ兆候が其処彼処で見られるようになっている。そのような社会に対して林が取り組むのは、エリートの生きる途の転換である。過疎地活性化のプレーヤーを東京のトップレベルの大学からリクルートする手法により、優秀で覚悟のある若者が、町と町の高校の刷新を実現している。単なる通常のコミュニティボランティアとは一線を画し、津和野にベースを置くビジネスの起業に向けて一步を踏み出す若者を多数輩出している。町の自治体や住民も彼らを受け入れ、「パートナー」となって腕を組み、リスクも成功も分かち合うというカルチャーを生み出している。キャリアパスの破壊的イノベーションが津和野から始まっている。

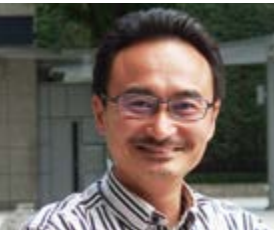


岩元 美智彦

Michihiko Iwamoto

2015年選出

日本環境設計株式会社 創設者・代表
http://www.jeplan.co.jp/



曾根原 久司

Hisashi Sonehara

2014年選出

NPO法人えがおつなげて
創設者・代表理事
http://www.npo-egao.net



川添 高志

Takashi Kawazoe

2013年選出

ケアプロ株式会社 創設者・代表
http://carepro.co.jp



片山 ます江

Masue Katayama

2012年選出

社会福祉法人伸こう福祉会
創設者・専務理事
http://www.shinkoufukushikai.com



大木 洵人

Junto Ohki

2012年選出

NPO法人ShuR 創設者・代表
http://shur.jp

鹿児島県出身。綿やプラスチックを含む全ての物をバイオエタノールに変える技術と、これまで「ゴミ」と見なされていたものを「エネルギーを生み出す資源」と再定義する消費者の意識改革の二本柱で、「包括的リサイクル文化 (Total Recycling Culture)」という理想を実現するシステムを構築。2016年には、大手企業180社、140を超える幼稚園と連携し、影響力を拡大している。

Michihiko is revolutionizing the way Japan thinks about used materials by creating a Consumer-Participated Recycling Culture, whereby used clothing and such electronics as cell phones can be recycled and turned into bio-ethanol and precious metals, without leaving any waste. His method loops in both corporation and individual consumers as active players in the circulation of used produced into energy resources.

長野県出身。金融機関のコンサルタントとして、バブル経済の崩壊を経験。これを機に、新しい経済活性化のあり方を求め、1995年に東京から山梨県の農村へ移住。耕作放棄地の再生を独力で始める。2001年に「NPO法人 えがおつなげて」を設立し、都市と農村の交流を進め、都市部の企業の人材研修等を目的とした企業ファームを開発。また、都市部のニーズと農村資源をつなげる経済活性化の手法を開発し、日本全国の農村の起業家育成を行っている。

Hisashi rejuvenates deserted agricultural communities by spurring urban residents to visit, practice farming, and engage with the local people. His program offers an agricultural experience that meets the needs of city dwellers that yearn for rural living, and corporations that look for human resource development for employees.

神奈川県出身。1項目500円で駅ナカなどで出来る「セルフ健康チェック」を展開。自己採血のため医療行為とはせず、医師がいない場所でも健康チェックができるシステムを実現。病院で働くという従来の看護師の仕事の限界を打ち破り、地域で起業するという新しいキャリア・パスを作りだした一方で、既存の医療システムでは解決できない生活習慣病予防と医療費抑制の課題を解決する新しいヘルスケアシステムを構築した。2014年には日本の新しい医療制度として位置付けられることとなった。

Takashi is extending access to healthcare in Japan by creating new career paths for nurses working outside hospital walls. A key element of his approach is a system of self-check medical stations where patients can access information about their health and preventative health measures.

※第10回スピーカーシリーズ登壇者

大阪府出身。日本社会の高齢者看護に対する姿勢と価値観を1980年代から変革。きめ細やかなアプローチと価格的にも手の届きやすい快適な高齢者ホームは「伸こう会モデル」として知られ、2000年のベネッセ社への売却で一気に普及した。売却後は、公営のホームの改革を進めている。2016年には新しい「デイケアセンター」のモデルとしてオンコープレナー・カフェ (The Encorepreneur Cafe) を米オレゴン州ポートランドでスタートした。

Masue has developed a contextually sensitive approach to changing attitudes and values about nursing care. She has created the broadly utilized Shinkou-Kai model for private nursing homes which provides comfortable yet affordable housing options for Japanese elderly, while employing non-Japanese caregivers traditionally shunted by society.

群馬県出身。手話通訳士として「手話を入力する特別なキーボード」と「手話のオンライン辞典」の二つの要素から構成されるオンライン手話辞典 Slinto(スリント)を開発。2015年には、「手話の終わり」という、手形と位置からも絞り込み検索ができる新機能が追加された。今後は、日本と香港を中心にインドやベトナムなどへのアジア展開を進めていく予定である。

Junto developed Slinto, an online sign language dictionary, to look up a word or a sign while making it possible to directly translate from one language's sign to another. In 2015 Slinto added a new function of further research refinement.

Ashoka Fellow Speaker Series アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ

アショカ・ジャパン発足後、2011年～2017年にかけて、6カ国10名のアショカ・フェローを招聘し、日本の聴衆に向けた講演では、大きな学びとインスピレーションを与えました。今後も、世界中で活躍するアショカ・フェローによる講演会「アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ」を開催していきます。これまでに来日した10名のアショカ・フェローを紹介します。

Ashoka Japan has invited 10 Ashoka fellows from 6 countries since 2011 to give speeches in front of the Japanese audience as speakers of the 'Ashoka Fellow Speaker Series'. Here are the Ashoka Fellows who have inspired many people in Japan through their presence and speeches.

12



Jerry White
ジェリー・ホワイト
2009年選出
Survivor Corps
giStrat
共同創設者・代表

http://landminesurvivors.org
https://www.gistrat.com

戦争や紛争で地雷を武器の一つとして使うのは当たり前だった1990年代までの状況下で、世界初の国際地雷禁止キャンペーンを立ち上げ各国の政策へ影響を与える。同時に、数万人の犠牲者を対象に人工義足や義手の支給、カウンセリング、職業訓練を行うシステムとして「地雷サバイバーズネットワーク（後 Survivor Corps）」を共同設立。その功績に対して1997年にノーベル平和賞を共同受賞する。また、英国ダイアナ妃の亡くなるまでの半年間、ボスニアの地雷犠牲者を訪ねる同妃の巡礼の旅の指南役を務めたことでも知られている。

大学生の時に地雷で片足を失った経験から、彼のまったく新しい人生が始まった。

大学2年の夏休み、クラスメートと共にイスラエルへ山歩きに行った。歩いていると右足元で大きな爆発音がし、気がつくやうに右足の膝から下が失くなっていった。この瞬間、それまで不自由なく青春を謳歌していたブラウン大学の学生ジェリー・ホワイトの新しい人生がスタートした。3ヶ月の治療とリハビリの後アメリカへ戻り、2年後に予定通り卒業。上記の活動によって、2009年アショカ上級フェローとして選出される。2013年から3年間は、オバマ政権で米国国務副次官補を務め、ヒラリー・クリントン前国務長官が創設した紛争安定化司令室の運営にあたった。戦略立案・連携の責任者として、紛争外交のためのデータ駆動型戦略を展開するために、高等解析とエージェントによるモデル化の手法を導入。予知率80～90%というエビデンスを示すこのモデルを世界各国の政府や企業に導入するため、2015年米政府を離れ「ジー・ストラット（giStrat: Global Impact Strategies）」を共同創設し、CEOを務めている。現在、米バージニア大学で教鞭をとるほか、宗教の名の下に行われる大量殺害を阻止するための国際キャンペーンである「Global Covenant Partners」委員会の共同議長を務めている。

目の前の「事実」を直視せよ！人生はそこから始まる！

本講演では、ホワイト氏自身が地雷犠牲者となった体験から、ノーベル平和賞を受賞するに至る活動までの道のり、英国ダイアナ妃との地雷犠牲者巡礼の旅、そして現在新たに取り組む、予測ソフトウェア会社「ジー・ストラット（giStrat: Global Impact Strategies）」の立ち上げといったジェリー・ホワイト氏の歩みと共に、日本の聴衆へのメッセージが紹介され、来場者の心を動かし、大きなインスピレーションを残しました。その一部を紹介しします。

「社会をより良くするための一人の人間として生きるために必要なのは5つの「レジリエンス（立ち上がり進む力）」のレシピ」である。この「レジリエンスのレシピ」は、ボスニア、カンボジア、イスラエルをはじめとする10を超える国々の数万人の戦争犠牲者とトラウマ生存者から、様々な大学による25年間に渡る聞き取り調査を元につくられた研究結果である。それは、1.事実と直面する（Face Facts） 2.人生を選ぶ（Choose Life） 3.助けを求める（Reach Out） 4.立ち止まらずに動け！（Get Moving） 5.「お返し」する（Give Back）。日本でも起こりうる大きな災害や、乗り越えなければならない深い悲しみにあなた自身が直面した際、その後の人生も「犠牲者」として生きるのか、そうではなく、立ち上がり進む力（レジリエンス）を持って生きていくのか。あなたはどちらになりたいだろうか？

（中略）

私たちが生きるこの時代では、今まさに直面している世界中の複雑な問題に対処するために、かつ、単純で表面的な解決策を避けるために、「適応する」つまり「マインドセットを変える」必要がある。

（中略）

世界の歴史に残るアイコンは、どちらか？核兵器の使用を容認して戦争終結を実現したトルーマン大統領か？それとも、広島へ出向いて、原爆の生存者を抱きしめたオバマ大統領なのか？私たちに課せられた仕事は、レジリエンスと、勇気と、新時代の知恵を備えた次世代のゲーム・チェンジング・リーダーを輩出する具体的な準備をすることである。彼らは、ただ「survive（何とか生き残る）」ではなく、「thrive（いきいきと生きる）」するリーダーとなつて、これからやってくる何十年もの平和を築いてくれるだろう。」

「Game-Changing Leadership in a Complex World（複雑化した世界の新しいリーダーシップ）」2017年9月ジェリー・ホワイト氏の講演より抜粋

※講演会での全原稿は、アショカ・ジャパンホームページよりダウンロード可能です。



1



Tri Mumpuni
トゥリ・ムンプニ
2006年選出 インドネシア
IBEKA 創設者・代表

インドネシアにおける、電力供給の「地域協力型」スキームを開発。インドネシアは天然資源にあふれているにも関わらず、政府が手掛けた数多くの水力発電は失敗に終わっていた。そこで、小型の水力発電を電気供給のないコミュニティに持ち込み、住民は発電の設計や運営を担う。また余った電力の販売権を各コミュニティが持ち、電力売却によって得た収入でコミュニティのクリニックや学校の経費をまかなえるシステムをつくった。これまでに、インドネシアの60地域で導入されている。

第1回 2011年11月 東京・大阪

4



Anshu Gupta
アンシュ・グプタ
2004年選出 インド
GOONJ 創設者・代表

インドにおける、継続的な衣類寄付の仕組みを構築。インドでは、総人口の35%が絶対貧困線以下の生活を強いられており、一枚の衣類を購入するために食費を削り、高利貸しから借金する人も珍しくない。そこで、効率的な物流管理やマネジメント体制、教育活動との連携を通して、資源の再配分を可能にする仕組みを構築。インド14州100団体以上の市民セクターや企業等をネットワーク化し、毎月10トンもの物品寄付を回収・分配、農村貧困層の生活向上に繋げている。また、災害時の緊急援助対応システムや貧困地域の学校への物品寄付の仕組みも立ち上げている。

第4回 2013年3月 東京

7



Andreas Heinecke
アンドレアス・ハイネッケ
2005年選出 ドイツ
Dialogue School Enterprise 創設者・代表

「自分たち」と「あの人たち」ではなく、人々が「障害」を「能力」として捉えられるプログラムを開発。1988年「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」を創設する。暗闇の空間は、参加者の「自分たち」と「あの人たち」という偏見や異文化による心の溝を埋め、対話を促すプラットフォームとなった。その後、耳の不自由な人に焦点を当てた取り組みも開始。創設以来、世界35カ国700万人を超えるプログラム参加者、7000件を超える視覚・聴覚障害者の雇用を生み出している。「世界中の子どもたちが、このプログラムを経験してエンパシーを育てるのが、僕の目標です。」とハイネッケは語る。

第7回 2014年4月 東京・大阪

2&11



David Green
デビッド・グリーン
2001年選出 アメリカ
IMPACT USA 創設者・代表

先進国並みの医療を、世界の約90%に当たる極端に貧しい人々（BOP人口）に届けるスキームを開発。IMPACT USAで取り組む。途上国における、失明の最大の原因である白内障を患う人々に、先進国並みの外科手術を先進国の2%程度の治療費で提供する仕組みを1992年に確立。患者全体のうち、半分以上が「無償」、35%が「実費の3分の2」、約18%が「実費を上回る値段」を支払う三段階の手術費用システムをつくり、寄付や政府に頼らずに「社会起業」として成り立たせる。2015年までに、恩恵を受けた人は5000万人にのぼる。

第2回 2012年3月 東京・宮城
第11回 2016年7月 東京

5



Mary Gordon
メリー・ゴードン
2002年選出 カナダ
Roots of Empathy 創設者・代表

子どもたちが「感情リテラシー」を育む教育プログラム「ルーツ・オブ・エンパシー」を開発、行政区単位で教育現場に導入。子どもたちが赤ん坊を囲み、観察を通して自身の感情・心理を掘り下げる時間から成り立つプログラムである。いったん自分の感情に焦点を当てる習慣が身につくと、他者の感情にも敏感になり、その結果いじめなどが減少することが実証されている。9カ月間のプログラムに参加した4～14歳の子どもたちの間で、いじめや仲間はずれが90%減少するという調査結果が出ている。

第5回 2013年7月 東京・大阪

8



Jim Thompson
ジム・トンプソン
2004年選出 アメリカ
Positive Coaching Alliance 創設者・代表

「勝つこと」と「人間として成長すること」のダブルゴールを掲げ、スポーツ心理学に基づき開発されたのが、PCAコーチ法である。ROOTS（Rules, Opponents, Officials, Teammates = ルール、競争相手、審判、仲間）に対する尊重をスポーツの基本とし、練習ではELM（Efforts, Learning, bouncing back from Mistakes = 努力、学習、ミスから立ち直る強さ）をアスリートから引き出すことを目指す。2014年までに北米約1700の学校やユースプログラムに導入され、参加学生は600万人を超える。今やアメリカの若者スポーツコーチの基準となっている。

第8回 2014年11-12月 東京・京都

*第10回スピーカーシリーズ登壇者は、川添高志（日本/2013年選出フェロー）です。取り組みについては、P13をご覧ください。

3



Al Etmanaski
アル・エトマンスキ
2002年選出 カナダ
PLAN 創設者・代表

「内側に隠された才能と情熱を見出す」アプローチによって、障害者とその家族同士をつなげる仕組みを構築。障害をもった子どもが潜在的に持つ能力を生かせる方法での自立促進を行う。また、その保護者の負担軽減にも目を向けており「自分が死んだら我が子はどのようになるか」という不安や孤独感を抱く保護者に向けて「障害者積立基金」を設立。同じ境遇を持つ同士の相互扶助環境をつくった。のちに、カナダにおいて約6兆円になる新たな民間年金市場の創出に繋がり、国家による障害者支援から完全に自立する新しい形をつくった。

第3回 2012年11月 東京・京都・宮城・大分

6



Jill Vialet
ジル・ヴァイレット
2004年選出 アメリカ
Playworks 創設者・代表

学校の昼休みを「安全で楽しい遊びの時間」にし、子どもたちの学校生活をより良くするためのプログラムを開発、プレイワークスを設立する。本来楽しいはずの昼休みが、いじめや喧嘩によって「精神的ストレスを生み出す時間」となっている状況を打破するための「楽しい遊びの時間」を提供。子どもたちのロールモデルとなる地域の若者を「昼休みリーダー」として訓練し、小学校に派遣。2013年現在、23都市380校、28万5000人の生徒が参加。導入校ではいじめや暴力が51%減少している。

第6回 2013年10月 東京・大阪・広島

9



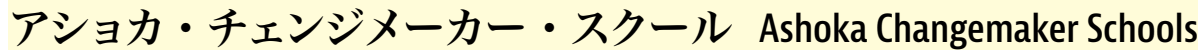
Sascha Haselmayer
サシャ・ハゼルマイヤー
2011年選出 デンマーク
Citymart 創設者・代表

世界各地の都市が抱えている課題を公開し、ソリューションを提供する世界中の企業や研究機関に公募をかけ、マッチングを行うスキームがシティマートである。市民の暮らしの質の向上を目的とし、公共サービスの費用対効果の改善を行う。副次的な目的としては、新市場創造による地域経済活性化を通して、都市課題の革新的な解決策導入を推進している。2014年までの5年間に42都市と1200の企業をマッチングさせ、69件の課題を公開し30以上の先導事業を実現させている。

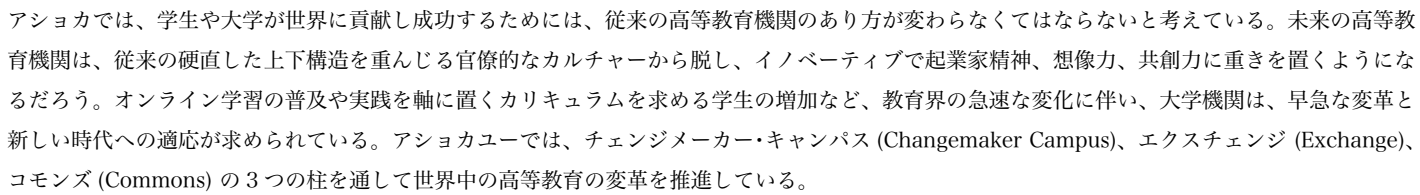
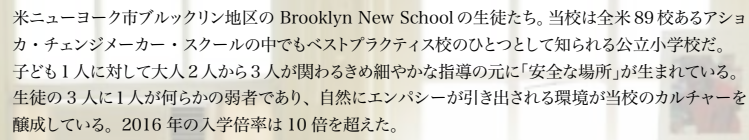
第9回 2015年12月 東京

加速する変化の波に乗り、新たな波をつくる側になるのか？または、波に飲み込まれてしまうのか？新しい時代の能力を培う準備をすぐにでも始めなくてはならないと私たちは考えます。その能力があるかないかで、「波をつくる側」と「波に飲まれる側」に分かれるのですから。「新しい時代を牽引するリーダーに期待される能力とは何なのか？」教育界や各界のリーダーたちが議論を繰り返しています。10年前に社会起業家（アショカ・フェロー）の取り組みの中から、アショカが気づいたこと

Years Initiatives in Japan



アショカでは、これからの時代を生き抜くためには、今まで学校教育が重視して来た能力だけでは足りないという認識を持ち、エンパシーと、チェンジメーカー・スキルを育成するビジョンを持った学校、教育関係者、保護者、地域、企業のネットワークを構築している。2012 年から具体的な取り組みとして、アショカ・チェンジメーカー・スクールの認定（現在 30 カ国約 300 校に及ぶ）、地域社会単位でチェンジメーカーの育成を志すプログラム (Changemaker school district) の構築、保護者を対象とした取り組み (Your Kids) などの試行錯誤が 34 カ国以上で行われている。日本では、2017 年 4 月よりリサーチと教育関係者のネットワークを中心とした活動を始動している。



Ashoka U Changemaker Campus

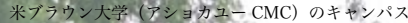
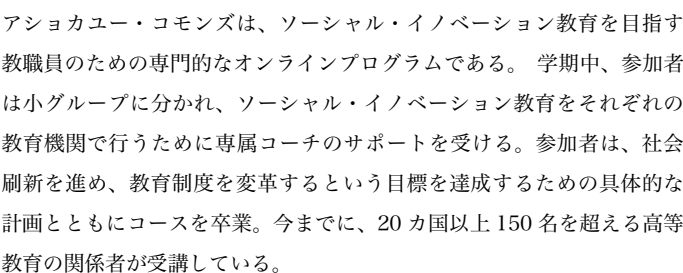
1. グローバルの高等教育の代表格であり、
2. 「社会刷新」と「チェンジメーキング」を実現するためのサポートシステムをキャンパスの隅々にまで行き渡らせ、
3. 「協働」と「思考リーダーシップ」を通して、高等教育を一変させるための努力を惜しまない。



アショカユー・エクスチェンジとは、世界のトップの大学、教育機関、教育関係者が集まり、ソーシャル・イノベーションを軸とした高等教育の最先端の事例紹介や、ソーシャル・イノベーション教育を推進する参加者のネットワーキングを行う場所である。2012年より、サンディエゴ大学、ブラウン大学、メリーランド大学、チュレーン大学、マイアミデーブ大学などの米国のアショカユーのネットワークにある大学とアショカが共同開催している。



Ashoka U Commons



Youth Years

ユース・イヤーズ

アショカ・ユースベンチャー Ashoka Youth Venture

「変える力」が、新しい時代に欠かせない人材の能力であると私たちは信じています。
アショカ・ユースベンチャーは、「変える力（チェンジメーカー）」の実験の場とすることができます。
Ashoka Japan's Youth Venture initiative provides an environment to practice 'Changemaking' - a skill that we all must be equipped with to embrace the new era.

アショカ・ユースベンチャーとは、2000年にアメリカで開始した、12～20歳の若者を対象とした取り組みです。日本では、2010年から2011年にかけてのリサーチ及び実験を経て、2012年春より東北の震災に特化した「アショカ・東北ユースベンチャー・プログラム」として出発しました。2015年からは、東北の問題以外へも、課題の幅を拡げています。「これはおかしい！頭にくる！」と感じたことが動機となって行動を起こす若者を、アショカ独自の基準で「ユースベンチャー」として認定し、彼/彼女が失敗を恐れず自由にチャレンジできる一年間の“実験の場”を提供します。2012年以来、これまでに89チーム（約350人）の若者チェンジメーカーのネットワークが誕生しています。（2018年2月現在）

GOAL ユースベンチャーの目指すところ

外発的動機（名誉・地位・収入など）ではなく、内発的動機（本人だけがわかる充足感や幸福感）が原動力となって、社会のために行動する人間の育成を目指している。

脳科学では、「感情（情動）が目的を設定し（その後）思考が巡る」という通説があるように、「やりたい」と思えばどのようにやるかを頭で必死に考えるが、それほどやりたくないとかどのようにすればやらないで済むかを、私たちは考える。

依然として、人格の形成よりも記憶力、計算力、読解力などに重点を置く教育が受け入れられている社会の中で、アショカ・ユースベンチャーでは「これはおかしい！」と感じた心に蓋をせず、自身の想いを実際の行動に移している若者をリクルートし、その行動を試すための一年間の

実験環境を用意している。また、発想から行動までの全過程で「メンター」や「アドバイザー」などの大人の介入は一切せずに、本人とユースベンチャーネットワークにいる他の若者との関わりを通して前進することを鉄則としている。わたしたちは、大人からの意見や反応は若者の心の奥底に聞こえる微かな声を消すことになりかねないと考えているため、アショカ・ユースベンチャーでは、つまずきは成長の糧とみなし、リスクをとることを奨励している。

従来の「優秀さ」を測るための基準（情報収集能力、暗記力、偏差値、読解力、計算力など）に加えて、新しい時代に欠かせない能力は「変える力（チェンジメーカー）」であると、私たちは信じている。

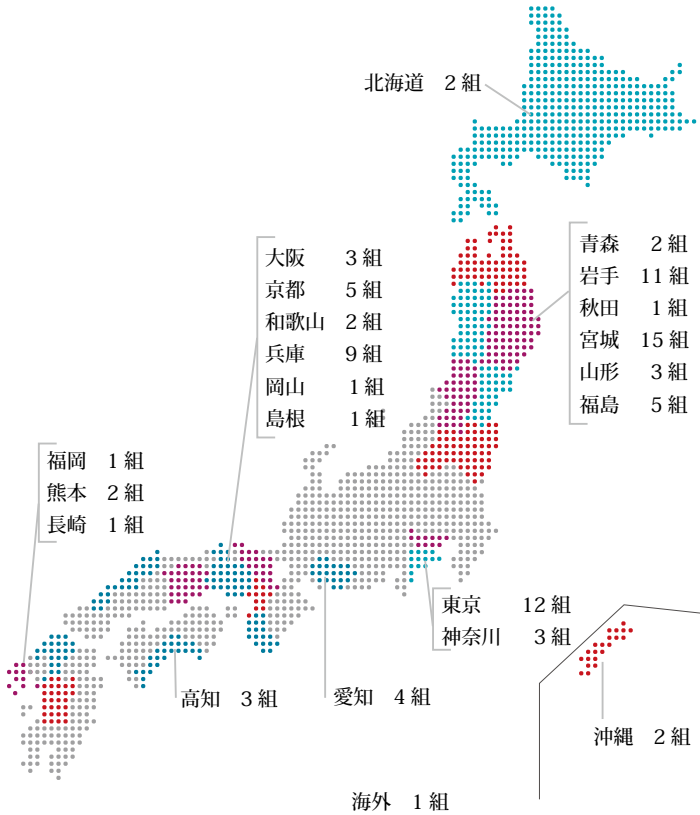
2012年7月から2018年2月までに89組のユースベンチャーが選出されました。
89 teams were selected between July 2012 and February 2018.

BENEFIT ユースベンチャーになると

- 上限10万円相当の活動支援を提供
- 全国・海外にあるユースベンチャーネットワークの一員として歓迎
- 海外留学や海外渡航の際、興味分野のフェローやアショカスタッフを紹介
- アショカスタッフとの1対1の面談の場を提供
- 来日するアショカ・フェローの講演会や、彼らと直接交流できる場の提供
- アショカユース認定校の一つである米アトランティック大学（COA）への奨学金の支給（当大学より、年間10,000ドルまで）
- アショカ主催イベントへ優先的に招待

若者チェンジメーカーに出遭う場 "We are the Change"

全国にいるユースベンチャー、行動している/しようとしている若者、また彼らを応援する大人が集結する半年に一度のイベント。新たなユースベンチャーを認定するパネル審査会、任期中のユースベンチャーによる活動報告会、アショカ・フェローによる講演会などが開催される。



2012年7月～2018年2月に認定されたユースベンチャーは89組にのびります。
2016年12月以降に認定された中から、12組を紹介します。
89 teams of Youth Venturers have been recognized between July 2012 and February 2018.
12 teams that were selected after December 2016 are introduced here.



成毛侑瑠樺 Uruka Naruge (17)

熊本県 | 志成館高等学院
Kumamoto | Shiseikan High School

自身の経験をもとに、教師と小中高生が対話を通して互いを理解し合える機会をつくり、多様な教育環境づくりに取り組んでいます。

Based on her own experience, Uruka is creating opportunities for increased mutual understanding between teachers and students through dialogue.

鈴木元太 Genta Suzuki (17)

島根県 | 津和野高校
Shimane | Tsuwano High School

これまで目につけられていなかった地域資源である竹を使って、地域のコミュニティを巻き込んだ活動を行っています。

Genta is building a community around the usage of bamboo, a regional resource that has so far been neglected.

ミルスタイン杏奈 Anna Milstein (17)

東京都 | アメリカン・スクール・イン・ジャパン
Tokyo | American School in Japan

経済的なランダム性によって学校に行けない同世代がいる現状を変えるべく、レーザーカッターで作った文房具を途上国に送っています。

Anna sends handmade stationery made with laser cutters to developing countries in order to change the current situation of young people not being able to go to school as a result of economic inequality.

村上鴻 Hiroshi Murakami (18)

兵庫県 | Hyogo

今の社会に生きづらさを感じている学生が集まり、自身の想いを深掘りできるイベントやミーティングを開催しています。

Hiroshi holds events and meetings where students who feel that they do not fit into the current society can gather and discuss deeper about their thoughts and emotions.

高山祐華 Yuuka Takayama (20)

東京都 | 青山学院短期大学
Tokyo | Aoyama Gakuin Women's Junior College

貧困や行きづらさを連想させる従来の「子ども食堂」のイメージを払拭する、地域住民と食育を取り入れた新たなモデルをつくっています。

Yuuka is creating a new kodomo shokudo (children's cafeteria) that will put an end to its traditional image and association with poverty that makes it hard for people to visit.

小笠原晟一 Seichi Ogasawara (21)

熊本県 | 東海大学
Kumamoto | Tokai University

熊本地震により活動が制限されてしまった県内の小中学生のバスケット部の状況を打開するため、バスケットゴールを届ける活動をしています。

Seichi delivers basketball goals to elementary and middle schools to revitalize the basketball clubs that had been restricted by the Kumamoto earthquake.

三浦七海 Nanami Miura (17)

宮城県 | 仙台西高校
Miyagi | Sendai Nishi High School

自身の被災体験をもとにした震災語り部をしています。また、地元の復興を発信するフリーペーパー作りに取り組んでいます。

Nanami does storytelling and makes free papers that are based on her own experience of disaster to minimize further casualties in the future.

照井秀星 Shuisei Terui (18)

岩手県 | 盛岡中央高校
Iwate | Morioka Chuo High School

岩手の高校生の投票率を全国1位にすべく、若者主導の、立候補者や市民を巻き込んだ活動を行っています。

To increase the voting rate among high school students in Iwate, Shusei organizes youth-led activities that also involve election candidates and local citizens.

千葉桃 Momo Chiba (20)

青森県 | 弘前大学
Aomori | Hirosaki University

何かしたいとは思っていても壁を感じていたり、勇気を出せない学生が一步踏み出すきっかけをつくる活動をしています。

Momo creates opportunities to take the first step for students who want to become more active but face hurdles or lack the courage.

この3年の間に特に東京では、高校生、大学生対象の様々な若者の社会起業コンテストの企画が充実し、助成金やサポートも受け易い環境が整ってきました。しかし、大学を卒業して社会刷新に人生をかけて取り組む若者のためのプラットフォームは、ほとんど存在しません。また通常の企業においても、アショカが最も重視する「変える力」と「エンパシー」を採用の大きな条件とする会社は殆どありません。こういう状況では、学生の時にせつかく引き出された能力を活かす機会もなく、社会をより良くする志を「職業」とするための第一歩を踏み出すことができません。2017年から実験的にスタートさせた、アショカ・ユースベンチャープログラムの延長上の取り組み「アショカ・レバレッジ (Ashoka Leverage)」は、アショカ・ユースベンチャーを一年間経験した若者が、卒業後ライフプロジェクトとして踏み出す際のサポートシステムです。

アショカ・レバレッジになると

- ・ 必要場合は生活費を1～3年提供する。
- ・ アショカのネットワークにある信頼性の高いアントレプレナーや弁護士事務所、プロフェッショナルからの高いレベルのメンターシップを提供する。
- ・ 海外視察などが必須な場合は、アショカの提携企業 ANA より無料航空券を支給する。
- ・ アショカのネットワークの協力者や協賛者と繋げ、成長を加速させる。
- ・ (支援を受ける側は)「Everyone a Changemaker」のムーブメントとともに推し進める。



夢を追い続けて、最高の人生を生きたい

活動について

震災後のボランティアで訪れた岩手県陸前高田市。そこで生活する中高生は、震災時に様々な人から助けられた経験から、「人のために何かしたい」という想いを持っていました。彼らの想いを形にすべく、「地域活性化×教育」活動として「高田と僕らの未来開拓プロジェクト」を20歳の時スタートしました。23歳、進路選択の時期、大学卒業後は東京に就職することを考えていました。そんな時、アショカ・ジャパン代表の渡邊奈々氏から「彩果の夢は何？」と問われました。自分の心の奥底の声に耳を傾けた時、「今も、これからも、夢をずっと追い続けて最高の人生を生きたい。」という本心に気づき、内定先の大手企業を断り、陸前高田への1ターン移住を決意しました。現在は、ありのままの自分自身で、内から湧き出るエネルギーを元に活動を続けています。生まれた環境に左右されず誰もが夢を追い続けられる社会を創りたい。そのために、小中高大学生までの一貫したキャリア教育を通して豊かな人が育つ最高の共有現場を陸前高田に創ろうとしています。

ユースベンチャーとして

アショカを通じて出会う全ての人に刺激を受けます。「なぜ、あなたがやるの?」「あなたの夢は?」といった私自身の心の奥底の声に耳を傾け、信じてくれる人たちのネットワークです。アショカは、様々な社会の違和感に苦しみながら進む毎日でも、必ず勇気と希望をもらえる、私にとってかけがえのない存在となっています。

上田彩果

Ayaka Ueda

2014年ユースベンチャー
2017年アショカ・レバレッジ

高田と僕らの未来開拓プロジェクト 創設者・代表
http://takapro.org

ユースベンチャー卒業生の今



山勢拓弥
Takuya Yamase

2012年ユースベンチャー
一般社団法人 Kumae
創設者・代表

kumae.net

リスクを取らずにできることは、限られている

活動について

カンボジアに来てゴミ山で活動する中で、教育水準の低さが貧困を招いていると感じ、2013年に日本語学校を開始。また、ゴミ山に通う人を減らすべく2014年にバナナパーパー事業を立ち上げ、2016年に現地の既存店舗に出品し、2018年1月にはカンボジア国内に独立した店舗をオープンしました。現在は11人のカンボジアスタッフを雇用しています。今後、新たなゴミ山がカンボジアの田舎に広がっていくことが予想されており、同じ問題を発生させないために、ゴミ山が環境に与える影響を発信するための資料館建設や観光客への啓蒙活動も進めていきます。

ユースベンチャーとして

僕は、深く掘り下げて考えることと行動の大切さを知りました。「こうなりたい」と語る人は多い中、それを行動に移せる人はなかなかいません。自分自身をつくるのは、想いから発した行動の軌跡であると思います。リスクを取らずにできることは限られているので、リスクを取りながら進んでいきます。その方が、人生にワクワクします。



矢野大地
Daichi Yano

2013年ユースベンチャー
NPO法人 ONE れいほく
創設者・代表

http://onereihoku.org

アショカ・フェローから学んだこと

活動について

現在は、過疎高齢化の進む高知県の中山間地域で、日本の若者がチャレンジしていける場をつくっています。漠然と今の環境から抜け出したいけれど抜け出せず悩んでいる若者を対象し、年間約1400人が訪れる拠点を4つ運営しています。若者が定着し地域の産業振興などにつながれば、20～30代の若者がいない地域にとって良い影響を与えられます。

ユースベンチャーとして

僕にとっての一番の学びは、数百万人の生活を変えるようなインパクトを出しているアショカ・フェローの生き方は、とてもシンプルだということです。彼らの姿から、僕も次第に、自分自身をシンプルな言葉で表現できるようになりました。以前は、複雑な言葉をめぐらして社会から批判されないよう行動していたのですが、そんなものを取り払い、自分が信じる道を突き進んでいるフェローの姿を見て、僕も社会起業家としての一歩を踏み出しました。



佐藤勇樹

Yuuki Sato (17)

福島県 | ふたば未来学園高校
Fukushima | Futaba Mirai Gakuen High School

福島県の農家の方々の想いを多くの人に知ってもらべく、高校生で野菜を育て、ファーマーズマーケットを開催しています。

Yuuki grows vegetables with students and opens a farmers market to have many people know about the feelings of farmers.



高須未来

Miki Takasu (21)

秋田県 | 東北工業大学
Akita | Tohoku Institute of Technology

地元秋田県で感じていた「物理的な孤独からくる、心理的なコミュニティの薄さ」を解消すべく、空き家を活かしたコミュニティ作りに取り組んでいます。

In order to overcome the feeling of weak social communities bonds that result from physical loneliness, Miki is working on creating communities through reusing vacant houses.



高野有都

Aruto Takano (18)

和田健志

Takeshi Wada (17)

福島県 | 原町高校
Fukushima | Haramachi High School

ゴミ拾いをスポーツ感覚でできるイベントを開催しています。住民が楽しみながら地域について学び、町の活性化を図れる企画をしています。

Aruto and Takeshi are revitalizing their local communities by organising an event that makes picking up rubbish a sports sensation.

賛同者の声 Voices from our Supporters



鈴木寛

Kan Suzuki

東京大学・慶應義塾大学教授、
文部科学大臣補佐官

ここには「本物」がある！

アショカはさすがだと思うのは、妥協を許さない「本物」だからです。ソーシャル・アントレプレナーシップが日本で生まれて20年近く経ち、その進化の過程で私はいろいろな形で関わってきました。「社会をより良く変える」という初心から離れ、ビジネスモデルだとか、アイデアだとか、プレゼンの善し悪しとかの「形」にとらわれ、ソーシャル・アントレプレナーシップのバックボーンである「心の深さと真摯さ」が忘れられてきていると感じます。世界を根底から変えていくのは、ビジネスモデルでもアイデアでもなく「人間」に他なりません。このプロセスをアショカは非常に大切にしています。アショカ・ユースベンチャーの若者たちが、日本に、「本物」の価値観が貫く未来を創りあげられるだろうと私は信じています。

※2015年9月開催第5回 We are the Change でのスピーチから抜粋



パルタップ・チョハン

Partap Chauhan

2012年選出アショカ・フェロー、
医師

将来日本を変革するプレーヤーが生まれることは間違いありません。

東アジアでは、社会や組織全体としての調和と成功のために個人の存在が蔑ろにされる傾向があります。一人ひとりの声が尊重されず、一人ひとりの気持ちが抑え込まれる社会には、本当の満足感や幸福感はありません。そんな社会で、アショカ・ユースベンチャーは、「心の声を聴け！その声に押されて一歩踏み出せ！」と、若者たちに呼びかけます。さらに「失敗しても良い！失敗なくして成長はない！失敗を恐れることこそが失敗だ！」と、日本社会のカルチャーに反した呼びかけが続きます。今は、文化的な孤島のようなユースベンチャーの若者ネットワークから、将来日本を変革するプレーヤーが生まれることは間違いありません。



大町祐輔

Yuusuke Oomachi

みずほ銀行ウェルスマネジメント部
部長

百花繚乱 みんな違って、みんな輝いている。

アショカ・ジャパンの「We are the Change」に参加する若者たちを見て感じた言葉です。みんな違って、みんな輝いていました。綺麗な花ではなく、雑草の輝きです。どんなに踏みつけられても何度も跳ね返し、以前よりも高く強く伸びていく、まさに心にレジリエンスが宿っていました。パネリストの立場を忘れ、チャレンジする若者たちの「想い」にどうすれば辿りつくことができるだろうかと考えていました。「想い」に近づくために、私自身が鎧を脱ぎ、自らに向き合う時間でもありました。アショカ・ユースベンチャーは、若者たちのチャレンジの場であると同時に、大人たちにとっての学びの場でもあるのです。

Co-Creation | Walls No More

コークリエーション | ウォールズノーモア

行政、企業、市民の3つのセクターの壁を壊し、同じ目標に向かう「共創 (Co-Creation)」が世界を大きく変革します。

Co-Creation: Business, Government and Citizen sectors team up for the fundamental solution of imminent issues we face.

世界中で環境破壊や気候変動による影響は深刻であり、ヘルスケアシテムは過剰負担に悩み、現在でも世界で9人に1人が飢餓に苦しんでいます。私たちは、この状況を改善する有効な手立てが今なお見つからないことに焦りを感じています。

企業の社会的責任という通念は19世紀から存在していますが、近代では1960年代から企業の環境への責任 (CSR) が盛んに問われるようになりました。とりわけ、グローバルな経済活動が展開され始めた1990

年頃は、より注目を集めるようになりました。しかし、これまでの企業で定着した課外活動的なCSRモデルは「美しく心温まる善行」の域を出ず、世界が直面している喫緊の問題の解決には程遠いという声が高まっています。

一企業、一政府、一市民組織が、単独で手をつけるには、残念ながら問題は余りに膨大かつ深刻であり、セクター間の壁を壊し「共創」することが答えではないかという意識が浸透し始めています。

世界初の本格的共創 アショカと独バーリンガーインゲルハイム製薬企業のパートナーシップの誕生

Partnership between Ashoka and Boehringer Ingelheim Pharmaceutial Company

ドイツの大手製薬企業バーリンガーインゲルハイム (BI : Boehringer Ingelheim) 社は、2010年の創業125周年を機に、同社のリーダーの間でこれからの目指す方向について議論が交わされ「BI社にはない見識と経験を持つCSO(市民組織)と組むことで、次の100年の方向づけが出来るのではないか」という結論に至った。

創業以来「社会への還元」という信条を貫き、「刷新なくして価値はなし」という鮮明なビジョンを持つBI社とアショカとのマッチメイキングを導いたのは、仏パリにあるコンサルティング会社だ。

BI社がアショカという極めてユニークな市民組織とのパートナーシップに踏み切ったのには、2つの理由があった。一つは両者が共通の価値観を持っていること。もう一つは、「最貧困層を顧客の対象から外す」これまでの製薬会社のやり方は、もはや通用しないことが明かだということである。

最貧困層のニーズをどうやって知り、施しでは

なく顧客として最貧困層をマーケットに取り込むためには、どのようなアプローチをしたら良いのか? この答えに行きつくヒントを探していたBI社は、世界93カ国でそれぞれの社会に深く入り込み変革を実現しているアショカのネットワークにその糸口があると見たのである。

2010年からの「まるで暗闇のなかを手探りで歩く」ような実験の期間を経て、

2011年、BI社とアショカとの3年間のパートナーシップ契約が締結された。

「社会を大きく変革するインパクトを生み出す」、「BI社の事業の発展 (長期的利益) を促す」ことを成し遂げるという2つのゴールを目指すパートナーシップとはどのようなものなのか?

変革は「プロジェクト」ではなく息の長い長距離マラソンである。いくつもの実験と失敗の繰り返しのプロセスにおいて、文化や課題へのアプローチが全く異なる両者がお互いを理解し合うことが共創の第一歩であった。BI社に限らず企業側には、社会起業の真髄である「不確実

で予測不可能、かつ曖昧なプロセス」に慣れることの努力が求められる。また、アショカに限らず社会起業側も「リスクをとることを良しとせず、硬直しがちな」企業の体質に痺れを切らさず忍耐強くつきあう努力をしなくてはならない。最終的に、両社の歩みにより、3年間に健康/保健の分野のフェロー50人を発掘。BI社の決定権のあるポジションにある社員が

アショカ・フェローの活動に半年間インターンとしてフルタイムで加わるEIR (Executive-in-Residence) プログラムなど、いくつかの具体的な成果が生まれている。このパートナーシッ

プをさらに推進し深めるため、2014年に第二回の3年契約を更新、そして

2017年には第三回目の3年契約を更新した。

3年間にヘルスケア関連のイノベーターを世界各国で15~21人発掘する他、BI社員の起業家マインドを引き出し高めるための様々な仕掛けを導入するなど、パートナーシップが深まると共に内容が成熟している。

フェロー・イン・レジデンス (FIR=Fellow-in-Residence) を日本でスタート!

FIR: Workshop for Japanese corporations facilitated by Ashoka Fellows

企業対象に、システミック・チェンジの体現者であるアショカ・フェローによる2日間の勉強会+ワークショップを開催します。



第一回は、サシャ・ハゼルマイヤー Sascha Haselmayer (2011年選出、P15参照) を講師に迎え、シティマートの構想が芽生えた時点から世界の都市イノベーションの最強の推進力となるまでのプロセスの解析を2日間に渡って行います。



第二回は、デビッド・グリーン David Green (2001年選出、P15参照) を講師に迎えます。年間約100万人の貧民の視力回復を実現しながら利潤を生む病院経営ビジネスモデルを創り、休むことなく拡大を続ける2000年来の軌跡を解析します。

参加費を含む詳細およびお申込は、japan@ashoka.org までお問い合わせ下さい。



ニュース

女性イノベーターがイタリアで集結! Women who change the World

開催地の北イタリア・ペラジオの宿舎

女性が弱い立場であることは、程度の差はあれ、世界共通です。アショカは、フランスのELLE財団と共に、ジェンダーの間の壁を取り除き誰もが輝く社会の構築に向けて模索を始めています。この取り組みの核チームの第一回顔合わせが2018年2月、北イタリアのコモ湖畔のロックフェラー財団の宿舎で行われました。5日間の集いには、メキシコ、エジプト、ナイジェリア、インド、インドネシア、ヨルダン、カナダ、イタリア、北米、英国、日本からの女性アショカ・フェロー9人とアショカの女性リーダーたちが集まりました。美しい自然の中で、「女性と社会イノベーション」を中心に意見交換を繰り広げました。9人のフェローたちは、法律改正までのインパクトを既に及ぼしている力強い社会変革者です。ジェンダーと国境を超え、大規模な社会イノベーションを体現している彼女たちの一部を紹介します。



「親」の役割が仕事人としての能力を高める



リカルダ・ゼッツァ
Riccarda Zezza

2016年選出 イタリア
MAAM - Maternity as a Master
共同創設者・代表

人間は多くの役割を持つほど全ての役割の能力が向上するという理論を実証したアンドレア・ヴィトゥーロと共に、2012年MAAM (Maternity as a Master) 理論を考案。「親」という役割がプロフェッショナルとしての能力の向上をも促すという理論を構築した。この理論をベースとして脳科学、行動科学、フォーカスグループリサーチ、個別インタビューなどの調査を2013年に開始し、2014年共著として「MAAM理論」をイタ

リアで上梓。同年イタリア大企業数社でMAAM対面トレーニングが導入された。さらに受益者を増やすために2015年デジタル版MAAMを完成させ、Poste Italiane (イタリア郵政) で導入された。2015年秋には、企業内で人材の開発と成長を促進するプロダクト開発ビジネスを発足。ヴェネツィア大学と協働で出産と子育て前後のエモーショナルインテリジェンスの変化や、企業内のカルチャーに与える影響などの実施調査が進行中。行政、企業の意思決定権を持つ女性が極めて少ないイタリアと日本の未来に光を投げかける。2018年冬、来日講演予定。

夫の遺産を未亡人が相続できないという現実を変革



ジョセフィン・ゼレム
Josephine Nzerem

2002年選出 ナイジェリア
Human Angle
創設者・代表

ナイジェリアでは、一家の主である男性が亡くなると遺産は妻や子供ではなく、血の繋がった男性に渡ると言う法律がある。恵まれた環境で育ったジョセフィンは、たまたま出会った少年から、父が亡くなった後、家の財産が全て親戚の男性の手に渡り学校を辞めたことを聞き、この法律を知る。遺書の効力は強いので、夫が生存中に遺書に明記すればそれで済むのだが、多くの男性は (高等教育を受けていても) 自分が死んだ時のことなど考

えたくないという態度がある。男性と対立して法律改正を迫るのではなく、彼女は遺書をかかないために起こる多くの不幸なケースについて男性に伝える教育プログラムをスタート。ロータリークラブ、教会、世界銀行、ブリティッシュカウンシルや地域団体と協働で、この教育のための集会を企画し広めている。この活動により夫が亡くなった後の様々な不幸な例に耳を傾け、遺書を書くことに決めた男性が急増している。2018年、彼女のチームの活動がナイジェリア政府に影響を与え、女性でも相続権を持てる法律改正が実現。ナミビアでこのプログラムの模倣が始まっている。

官民協働で児童強制労働問題に挑む世界初の効果的モデル



ハシナ・カービ
Hasina Kharbhih

2006年選出 インド
Impulse Social Enterprises
創設者・代表

ミャンマーやバングラデシュとの国境近くのインド東北の郡で生まれ育つ。この地方は隣接するミャンマー、バングラデシュ、ネパールの未成年の若者の人身売買が横行することで知られる。彼女の育った地区の近くには児童強制労働で成り立つ炭鉱が存在し、この事実を突き止めたハシナは高校のクラスメートと共に奴隷制度の撤廃に向けて17歳の時に活動を始め、数年後にこの炭鉱の閉鎖まで持ち込んだ。地方自治体、警察、法律団体、メ

ディア、市民団体の全てがチームを結成し、あらゆる面から人身売買を禁じるために取り組むモデルを樹立。

このモデル「Impulse Model」(旧「Meghalaya Model」) は、10年以内にインド東北領域のほとんどに広がり、児童強制労働と戦う最もインパクトのあるモデルとして、インド政府のほか、「UN Office on Drug & Crime」や「UN Women」の支援を得ると同時に、南アジアの児童強制労働を軽減する最善の取り組みとして、高い認知を得ている。

中近東初の女性が決定権を持つ農業組合を設立



ジナブ・アルモマニ
Zeinab Al-Momani

2009年選出 ヨルダン
Sakhrat Women's Society
Cooperative 創設者・代表

アラブ社会での女性の地位は極めて低く、教育やキャリアの機会は限られており、農業以外の産業の女性雇用率は28%と世界最下位だ。女性は農業において大きな役割を担っているが、収入は同じ仕事をする男性の半分~70%。ジナブ自身も大学に行きたいという希望があったにも関わらず、保守的な地方の慣習に従い19歳で結婚し出産。しかし、彼女は子供が生まれるとその地方で初めての保育園をスタート。続けて幼稚園と小学校を創

設した。アラブ社会の女性は家庭の中でも社会でも「決定権」と「信用」がない。ジナブは、女性による貧しく弱い立場の女性のための農業協同組合を創設した。男性だけが加入できるヨルダンの農業組合では、土地所有者であることがメンバー資格だが、ジナブは土地がなくてもメンバーになれるよう法律改正を促した。また組合メンバーの女性がローン資格を取得できる仕組みも加えた。貧しい地方の女性たちが自立し、決定権と信用を手に入れることが、その地方全体の成功に繋がるという信念を持つジナブは、アラブ社会の女性の人生を変えるリーダーとして注目されている。

2017 年 11 月システミック・チェンジへの助成基金「コーインパクト (CO-IMPACT)」が発足！

アショカが発足して 39 年。「システミック・チェンジ」こそが、世界の問題のより効果的な解決策であると、理解される兆しが見えてきました。2017 年 11 月 15 日に発足した「コーインパクト」という助成基金の発足者は、言わずと知れたビル・ゲイツやロックフェラー財団をはじめとする、世界の富豪です。「コーインパクトは、世界の最貧の人々の状況を大きく変革する可能性を秘めたフィランソロピーの革新的なモデルです。私たちもその一端を担っていることを誇らしく思っています。」と、ビル & メリンダ・ゲイツは語り、その出資金金は合わせて約 500 億ドル(約 556 億円)にのぼります。社会投資（寄付）を提供する側にとって、社会変革を推し進める組織や団体の投資先を選定することは容易なことではありません。それぞれの組織の安定性や信頼性を査定して、活動の内容

を精査するための労力と時間は計り知れないものです。この文脈の中で、成果が実証されている「システミック・チェンジ」への支援が効率的であるという認識が、新しい切り口の助成基金である「コーインパクト」の誕生に繋がったのです。アショカが、「コーインパクト」の発足までにアドバイザーとして関わってきたことは言うまでもありません。

コラボレーションを通して長期ゴールを目指すのが CO-IMPACT
「CO」とは、「共同して、一緒に、協働して」という意味の接頭語です。つまり CO-IMPACT とは、ソーシャルリーダー、投資家、ビジネスリーダー、行政などがそれぞれのリソースやネットワークや専門知識を共有して共に大きなインパクトを生み出すということを意味しています。

新しい時代の戦略は、「独占」から「協働」へ、「短期ゴール」から「長期ゴール」へ「コーインパクト」も、協働と長期ゴールの戦略を取り入れて出発します。556 億円というお金がどれだけの変革を可能にするのか。そのような超富裕層の人たちが、「応急措置的」にお金を使うのではなく「システミック・チェンジ」へ注ぐとするならば、そのインパクトは数百倍、数千倍、いや、それ以上になることでしょう。これは、39 年間のアショカ・フェローの活動とそのエビデンスからも明らかです。2018 年 6 月までに「コーインパクト」の最初の出資先が決まる予定ということです。

2017 年 4 月、アショカ・ジャパンに新スタッフが加わりました。



渡辺真帆
Maho Watanabe
ユース・イヤーズ 担当

1993 年英国生まれ。幼少期を英国で過ごす。帰国後、日本と英国の教育の違いに戸惑った経験から教育に関心を持つ。大学時代は、東日本大震災の被災地への訪問者が減っていること、災害の風化が進んでいることに疑問を抱き、大学生向けの被災地スタディツアーを立ち上げ、後にアショカ・ユースベンチャラーとして選出される。2017 年、上智大学外国語学部を卒業後、「自分で考え行動する人を輩出する教育を追求したい」という想いを胸にアショカ・ジャパンに就職。



中川七海
Nanami Nakagawa
ユース・イヤーズ 担当

1992 年大阪生まれ。大学時代、東日本大震災後の宮城県気仙沼市に誰もが足を運ぶきっかけとなる音楽祭を企画し、アショカ・ユースベンチャラーとして選出される。また、在学中に過疎地の地域活性プロジェクトに関わるため同地で一年暮らし、若者の意思決定機会の少なさ、そして若者を信頼しない大人たちの状況を知る。「若者が自身の生き方を自ら選び、行動し、周囲が彼らを奨励する社会を創る」という夢を掲げ、2017 年大学卒業後、アショカ・ジャパンに就職。

2018 年アショカ・ジャパン・アンバサダー (Ashoka Japan Ambassador) 発足のお知らせ

アショカ・ジャパン・アンバサダーとは、アショカ・ユースベンチャーの活動に 1 年間取り組んだ後、大学卒業後も、アショカのスピリットを継承し活動に参画する若者のネットワークです。そのメンバーを紹介します。



伊藤大貴
Hirotaka Ito

僕は、今の社会では埋もれてしまっている「人の可能性」を、アショカを通じ発見することが出来ました。アンバサダーとして、その活動をより加速させていきます。



上田彩果
Ayaka Ueda

アショカでは、自分の心に正直に生きていくことを学んできました。これからもアンバサダーとして体現し続け、誰もが自身の可能性を諦めず行動していける社会を創ります。



湯澤魁
Kai Yuzawa

僕は真剣に人と関わることで、相手の「チェンジメーカー」の瞬間を応援したいです。そのために、アショカの持つナレッジを活かし、より多くの人々に伝えていきます。



弘田光聖
Kousei Hirota

ユースベンチャラーとしてアショカに関わり始め、ここは社会に前向きな変化を生み出す人々の集合体だと知りました。これからも、私は人と社会に向き合い進んでいきます。

Join ASHOKA！アショカに参加する

メンバーシップを通して
会員制グローバルサポートグループに参加しませんか？

アショカ・フレンズ
Ashoka Friends East Asia

2015 年 4 月に発足した、アショカの活動を支える日本発のネットワーク。会員には、アショカ・ジャパンおよびグローバルの活動の進捗状況の共有や、アショカ・フェローや海外スタッフとの交流の場が提供されます。2016 年時点で日本のメンバー 11 名、韓国のメンバー 3 名。

アショカ・サポートネットワーク
Ashoka Support Network

2008 年、当時コンサルティング会社マッキンゼー・フランスの代表であったオリヴィエ・カイザー氏がアショカのビジョンに共鳴し、その活動を促進する手段として立ち上げました。2016 年 4 月時点でメンバーは合計 350 人。フランス、ドイツ、英国を中心に西ヨーロッパで活発に活動が行われています。

2014 年 ASN シンポジウムが開催された仏パリ市立大学

スタッフ、インターン、ボランティアとして
Staff, Intern, Volunteer

あなたの経験、技能、知識を活かしながら加わりませんか？

ノミネーターとして
Nomination

100 万人に 1 人のシステミック・チェンジメーカーと一緒に探しませんか？

次のような方を求めています。

■ 規模の大小にかかわらず、公益のための活動を自分で立ち上げ継続させた経験がある。

■ 想像力と創造力に富んでいる。

■ 現在の社会のあり方に疑問を持っており「こう変えたい」という想いと意志を持っている。

■ あふれ出るエネルギーと自分が社会を変えられるという自信がある。

■ 他の人の気持ちを配慮するエンパシーを備え、誠実で真摯な人柄である。

■ 常時、各国のスタッフとコミュニケーションをとるための英語力がある。

社会の膿を生んでいる根本的な構造を変革する「システミック・チェンジメーカー」の発掘にご協力ください！
アショカ・フェローの候補者は皆さんのごく身近にいるかもしれません。社会の綻びを見て見ぬふりをしたり、解決を他人任せにするのではなく、地道にコツコツと変革に取り組んでいる人に気がついたら、その人の活動は将来大きな変革に繋がるかもしれないのです。そのような方をご存知でしたら、是非ご推薦ください。
また、ご自分の活動が、アショカ・フェローとしての基準に適っているかも知れないと思う方も、是非ご応募ください。（アショカ・フェローの選考基準については、P12 をご参照ください。）

会員費・寄附などの詳細については、japan@ashoka.org までご連絡ください。

NEWS

2018 年世界 NGO ランキングで 5 位にラインクインしました！

1	ブラク BRAC
2	国境なき医師団 MEDECINS SANS FRONTIERS
3	スコール財団 SKOLL FOUNDATION
4	デニッシュ・レフュージ・カOUNシル DANISH REFUGEE COUNCIL
5	アショカ ASHOKA
6	マーシー・コー MERCY CORPS
7	オックスファム OXFAM
8	ハンディキャップ・インターナショナル HANDICAP INTERNATIONAL
9	ランデサ LANDESA
10	アキュメン ACUMEN
11	セーブ・ザ・チルドレン SAVE THE CHILDREN
12	キュア・バイオレンス CURE VIOLENCE
13	ベアフット・カレッジ BAREFOOT COLLEGE
14	ルーム・トゥ・リード ROOM TO READ
15	アポポ APOPO
16	ワンエーカーファンド ONE ACRE FUND
17	グラミン財団 Grameen Foundation
18	セレス CERES
19	サウデ・クリアンサ SAUDE CRIANCA
20	イスラミック・リリーフ ISLAMIC RELIEF

スイス・ジュネーヴに拠点を持つ NGO ADVISOR は、独自に開発した調査方法で世界の公益 NGO の内容を精査し、毎年トップ 500 ランキングを発表しています。
www.ngoadvisor.net

25

24

Ashoka Japan powered by



Ashoka globally powered by

Accenture	Omidyar Network
American Express	Porticus
American India Foundation	Potencia Ventures
Ann Lennartz	Puig Beauty & Fashion
Argidius Foundation	Rede Globo de Televisao
AVINA	Robert Bosch Stiftung GmbH
Barclays PLC	Robert Wood Johnson Foundation
Best Buy Children's Foundation	Rockefeller Foundation
Bill and Melinda Gates Foundation	SAP SE
Boehringer Ingelheim	Schneider Electric
C&A Foundation	Sentient Foundation
Cartier Charitable Foundation	Sergey Brin and Anne Wojcicki
Daniele Agostino Derossi Foundation	Siemens Stiftung SbR
Danone Ecosysteme	Skoll Foundation
David & Lucile Packard Foundation	Societe Generale Corporate & Investment
David and Phyllis Oxman Family	Banking
eBay Foundation	Staples Foundation For Learning, Inc.
Einhorn Family Charitable Trust	Swiss Re
EngenderHealth	The Arthur Guinness Fund
FEMSA	The Atlantic Philanthropies
Flora Family Foundation	The Craig and Susan McCaw Foundation
Fundacion Aquae	The Ford Foundation
Fundacion Un Sol Mon	The Gatsby Charitable Foundation
GE Foundation	The Hilti Foundation
Geopost group	The John D. and Catherine T. MacArthur
Goldman Sachs Foundation	Foundation
Google	The John S. and James L. Knight Foundation
Hystra	The Lego Foundation
Hyundai Department Store	The MasterCard Foundation
Hyundai Marine & Fire Insurance	UBS AG
IKEA Foundation	Ursula Zindel-Hilti-Stiftung
Intel Corporation	W. K. Kellogg Foundation
Jack Forrest and Debbie Pate Family	Weil, Gotshal & Manges LLP
Jenesis Group	Woodcock Foundation
John & Judy Harding Family	
Jurzykowski Family	
KAKAO, Inc.	
Lam and Anh Nguyen-Phuong Family	
Latham & Watkins LLP (SF)	
Latham & Watkins LLP (NY)	
Lemelson Foundation	
Martin und Gerda Essl Sozialpreis	
gemeinnutzige Privatstiftung	
Mashhoon Family Foundation	
McKinsey & Company (Frankfurt)	
McKinsey & Company (Sao Paulo)	
Microsoft	
Moxie Foundation	
MTV VIACOM Networks Latin America	
National Geographic	
Nike Inc.	

**Ashoka Friends Members and
Advisors 12/2016-2/2018**

Chris Lafleur
有馬充美
片柳淳子
片山ます江
熊平美香
西川耕平
林賢司
原田英治
別府理佳子
山本修

YV Panelists 9/2014 - 2/2018

Bill Carter
Clifton Strickler
David Corbin
Ken Hill
Nimesh Ghimire
Partap Chauhan
Sejal Hathi
相内洋輔
青沼愛
東朋子
足立聖子
有馬充美
飯島博
池田朋子
石本めぐみ
伊藤聡
伊藤大貴
岩本忠健
宇井孝司
上田理恵子
上原優子
及川武宏
大木洵人
大町祐輔
大堀匠
岡崎エミ
小澤いぶき
小野寺正一
籠島康治
片田孫朝日
片柳淳子
片山ます江
勝水与茶
金井真介
川合正
川添高志
川端元維
川原夕輝
菅野祐太
熊平美香
栗栖恭三
桑名由美
小池洋次
功能聡子
最勝寺綾
齋藤信太郎
齋藤涉
笹川剛
佐々木信秋
佐々木秀之
佐藤寛志
佐藤大
志田淳
下村達志
鈴木寛
鈴木雅剛
曾根原久司
高尾正樹
高谷秀司
武野昭
千葉伸一
戸野塚厚子
長尾ひろみ
中竹竜二
中野圭
中原奈都子
西川耕平
西出順郎
西出優子
布谷由美子
浜田宏子
早川輝
林賢司
半谷栄寿

常陸奈緒子
日野田直彦
古山隆幸
別府理佳子
松田清人
御手洗瑞子
箕輪憲良
向田麻衣
村川高彦
村田信弘
森山健
山崎賢治
山本恵子
和田明人

**Other Contributors
12/2016-2/2018**

Denise Crossan
Ho-yun Jung
Jay Friedlander
Ken Hill
荒川多恵子
伊藤健
牛木力
浦田庸子
岡本悦生
小澤いぶき
川島一郎
木田隆子
木本浩一
木山啓子
小松太郎
佐藤真司
柴垣顕子
鈴木寛
高尾正樹
武貞真未
田村史子
筒井伸子
坪井奈穂美
出口真紀子
長尾ひろみ
中竹竜二
林賢司
藤野淑恵
松下延子
三田真美
宮崎光世
宮原あけみ
文分知恵
八木圭一
柳瀬博一
矢部寛明



Staff | Intern | 2016-2018
Nanami Nakagawa | Maho Watanabe |
Nao Kato | Riika Fukui | Yoichiro Ashida |
Janic Kühner | Nana Watanabe

Global Office Liaison
Amy Neugebauer

Fellow Candidate Interviewer
Bill Carter

一般社団法人アショカ・ジャパン
〒150-0012
東京都渋谷区広尾1-11-2
AIOS広尾ビル407
TEL/FAX 03-6459-3144
Email japan@ashoka.org
URL japan.ashoka.org
(2018年6月以降www.ashoka.org/jpへ移行)
設立 2011年1月

ビル・ドレイトンからのメッセージ Message from Bill Drayton

“ The new reality requires a profoundly new type of leadership.

And, it requires everyone to be a practicing changemaker.

There will quickly be no role for anyone without these sophisticated skills.

Ensuring that every young person has his/her power and can contribute is the job of all of us. ”

ターニングポイントを見逃すな！

Seizing the Change Turning Point

歴史的な転換期、即ちターニングポイントは突然やってきて私たちを慌てさせる。大きなターニングポイントであれば尚更のことだ。今ここに訪れているターニングポイントを見過ごしてしまえば、取り返しのつかない過ちとなる。私たちはそのことを肝に銘じるべきだ。

まず背景となる歴史的事実を紹介しよう。

紀元前ローマ帝国後期から西暦 1700 年頃までの数千年間に、西洋では人口一人当たりの収入は不動だった。しかし、その間に小さな変化が積みもり 1700 年前後に転換期を迎えた。商いのセクターで、模倣や競争が始まったのだ。そして、1700 年から一人当たりの収入は雪だるま式な速度で増えていく。(紀元前ローマから 1700 年頃までの数千年間は) 専門職や組み立て工場などで、同じ作業を効率的に繰り返すことが社会を維持する術であった。この時代には、若い時に（銀行員であれ、理髪師であれ）特定のスキルを仕込まれ、それぞれの専門組織の壁で囲まれた箱の中で、その能力をさらに磨き上げることが唯一の生き方だった。

しかし、1700 年以降は、「繰り返し作業」のニーズは、加速度的に急減して、今に至っている。

では、2018 年の現実とは？ ひとつの変化が、さらに多くの変化をもたらし、それらの変化がさざ波のように無数の小さな変化を引き起こす新しい時代には、組織の在り方も当然変わる。硬直した組織構造や壁は、もはや有効ではなくなるだろう。人と人、組織と組織の間は、壁を崩してオープンに流動し、有能な個人が集まってチームを組み、そのチームがさらに他のチームと手を繋ぐことによって出来た大きなチームが、社会の基本となってゆくだろう。既存のヒエラルキーとは対極の、新しい繋がり方、新しいフレームワークが基準となる社会。こんな新しい時代への転換期がすぐそこまで来ている。

新しい社会構造では、リーダーシップの在り方も全く異なってくるだろう。明らかなのは、チェンジメーキング・スキルがリーダーの必須の資格となるということだ。チェンジメーキングは極めて複雑で高度なスキルだが、そのスキルを持たないものは取り残されていく。それだけは、はっきりしている。

ここまでの話をご理解いただけたなら、これから私の言わんとすることの意味はすぐにわかっていただけるはずだ。つまり、「まだ 10 代のうちにチェンジメーキング・スキルを磨く練習を始めなくてはならない」ということだ。子どもたちだけでなく、保護者や、国にもこの緊急性をご理解いただきたい。夢、即ち自分の成し遂げたいゴールに向けて、それを実現するためにチームを組み、学校や国を、世界を、より良くするために変えていく、という極めて高度で複雑な能力を速やかに育まなければならない。

チェンジメーキングを自分自身の力で経験した若者には、人生を怖がらずに生き抜く「力」が備わる。社会に真の意味で貢献するという最もパワフルな力は、彼らに生きる自信を与える。

世界の秀逸なアントレプレナーたちをご存知だろう。では、彼らのほとんどが、10 代のうちに何か新しいプロジェクトを興す経験をしているということをご存知だろうか？アショカ・フェローに限れば、その 8 割余りが 10 代で何かを自力で興した経験を持つ。LinkedIn に登録した 4 億 2500 万人のうち、10 代で何かを始めた人たちは、何も始めなかったグループの 4 倍も C レベル(CEO,CFO,COO など)の企業重役になっている。さらに創業者、共同創業者の割合は 5 倍にもなるという。チェンジメーカーが少ない社会には、数多くのチェンジメーカーが存在する社会のような競争力はないということを雄弁に証明するデータだ。

今、この歴史的ともいえる大きなターニングポイントに生きる私たちにとって最も重要な仕事は、若者一人ひとりの「チェンジメーキング」の能力を育むことに他ならないのだ。

ASHOKA 創設者・CEO
ビル・ドレイトン

Bill Drayton
Founder and CEO of Ashoka



